

昭和十一年二月

地理學談話會會報

第三冊

石橋博士還曆記念特輯

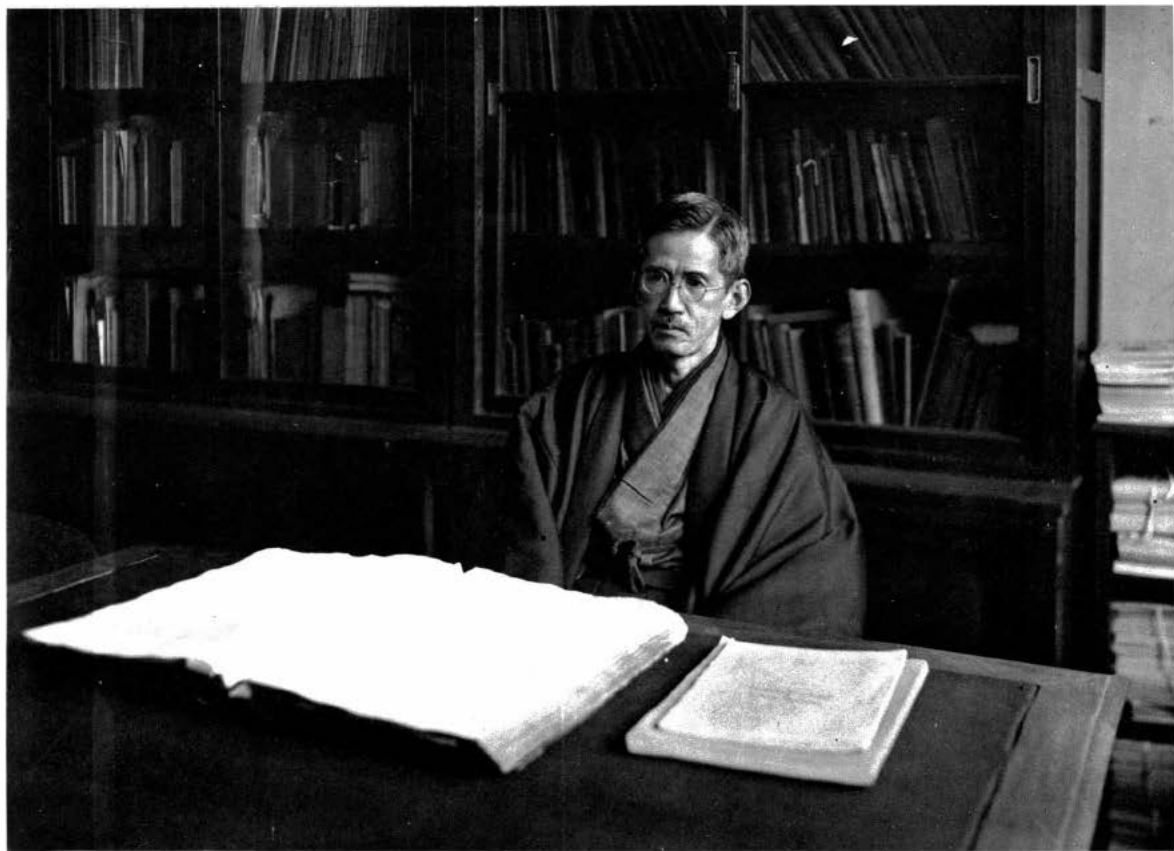
京都帝國大學文學部地理學教室

昭和十一年二月

地理學談話會會報 第三册

石橋博士還曆記念特輯

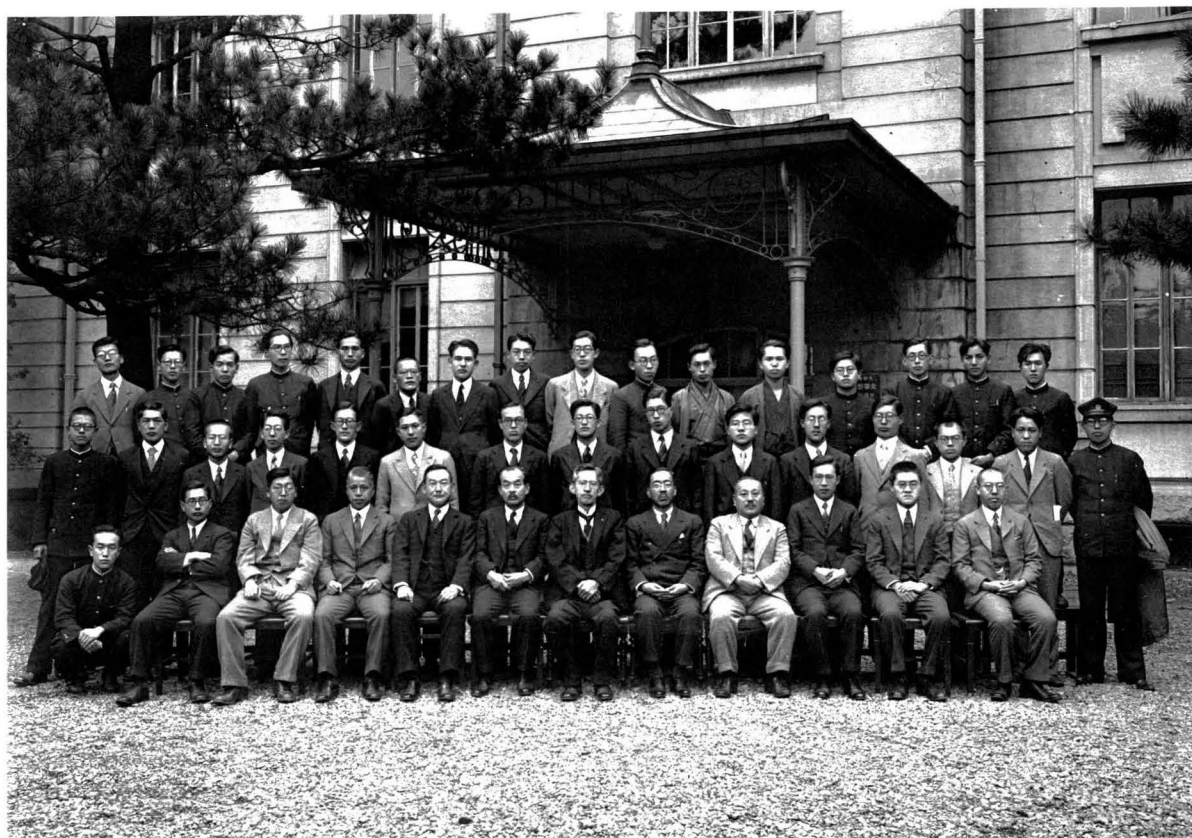
京都帝國大學文學部地理學教室



石橋博士近影



石橋博士還曆記念撮影



影撮念記會大會話談學理地回三第

地理學談話會會報

第三冊 目次

教室回顧三十年……………石橋五郎……………一

石橋博士論著目錄……………三

石橋先生の還曆に因みて……………二八

石橋先生に關する感想

中野竹四郎

石橋博士のプロフィール

瀧本 貞一

神戸凌霄會主催石橋先生座談會の概況

田中 秀作

輓近地理學界の動向と石橋先生

米倉 二郎

人情味豊かな石橋先生

勝田 圭通

我が師を誇る

辻田右左男

調和景觀のために

小牧 實繁

思ひ出

野澤 浩

一番感銘した御教訓

小野 鐵二

頌 壽

室賀 信夫

石橋先生の還曆を祝ひて

宮川 善造

石橋先生と私

日下 卓造

石橋先生の御高德の一斑

村松 繁樹

消息にかへて——一つの心

谷淵 梅龜

卒業後の感想

島 之夫

石橋博士還曆記念事業經過……………五

肖像畫並に記念品贈呈式次第……………七

研究の一端 六一

臺灣の高地生活

内田 勣

別府温泉發達の原因

兼子 俊一

談話會報告要旨 七一

教室雜記 八三

會員消息 八六

後記 八八

地理學談話會會報

第三冊 昭和十一年

教室回顧三十年

石 橋 五 郎

明治四十年 明治四十年の八月、自分は五十日の支那旅行から歸つて未だ疲れの消えやらぬ時であつた。一日當時新設の京都帝國大學文科大學に置かれた史學科の組織工作に當つてゐた内田銀藏博士から招かれた。その時の話によれば新設の史學科には地理學を他の國史西洋史東洋史等と並んで獨立學科としたい意圖のもとに專任の教授の必要があり、既に小川琢治氏が教授の候補者に内定してゐるが、當時氏は間島の地質調査事業に従事して明年迄赴任が困難なる爲、取敢ず貴下に来てもらつて地理學の講義を始められ度いとこの事であつた。そこで私は本官の神戸高等商業學校教授のほか兼官の文科大學助教授となつて、十月から開講する事とした。併し京都からの話が甚だ突然であつたので、講義原稿の爲自分は非常な勉強を餘儀なくせられた。講義の方針として

小川教授の自然地理學に對し自分は人文地理學を講ずる事とし晝夜兼行ラッツェルのアントロポゲオグラフィを精讀し之を基礎として兎に角人文地理學の體系を建てた。當時の人文地理學界は我國と云はず歐米諸國でもラッツェル以外には著書もなかつたので自分の講義編成の苦心は並々ではなかつた。殊に當時京大の史學科は草創の際でもあり地理學科としては獨立せる講座として我國で最初に設けられたものであるからその設備や参考圖書の蒐集等に就いて自分は頗る迷つた。自分は兎に角地理學の研究の基礎となる地圖だけは眞先に蒐集する必要があると考へ先づ陸海軍兩省の既刊地圖全部の寄贈を受くる事に成功した。この地圖は今尙教室に残つてゐるが測量部の地形圖の如きは幾度か改訂せられた今日のそれと對照して地物の變遷を知る上に貴重なる文獻と思つてゐる。

明治四十一年

斯くて明治四十一年の五月小川氏が正教授として來任せられたので私は責任は輕くなり、教室の經營を専ら小川教授に御願する事にした。その年の七月になつて地理學科の專攻學生が決り寺田貞次君と樋口津禰太郎の兩君が志望せられた。その秋大阪經濟雜誌社の主催で西宮附近の歴史地理の講演會が催された。その時小川教授は武庫附近の地形に就いて話され自分の演題は武庫地方に於ける聚落の變遷と云ふのであつた。この講演は恐らく我が日本に於て純地理學の最初の公開講演であつたと思

ふ。而して、自分の講演は僭越乍ら、我國に於ける聚落地理研究の最初のものであると信じて居る。

明治四十二年 翌四十二年になると、チベットの大探検家スヘンヘーデンが大谷光瑞伯の招に應じて、來朝したので、大學でも之を學賓として迎ふる事になり、地理學關係の人々が専ら斡旋の衝に當つた。

明治四十三年 四十三年の一月地理學談話會の基礎が置かれたが、同年の春自分は文部省留學生として、留學を命ぜられたので、當分は小川教授だけで地理學の授業を擔當せられてゐた。

同年の九月になつて廣島高等師範學校教授の中目覺氏が講師として、隔週來學専ら經濟地理を講義せられた。これから大正元年迄自分は留學中であつたが自分の留守中教室としては、小川教授の下に第二期の學生中野竹四郎君第三期の學生に楠田鎮雄君等があり、助手としては初めに東大の西洋史出身の山口浩義君と中野竹四郎君があり、後に楠田君が卒業されて大正二年迄助手を勤務された。此の間自分は英獨二國に學び、イギリスではマツキンラー氏やチズム氏等につき、ドイツにてはライン、バーチュ、ベック等の諸教授について地理學の研究に従事したが、ロンドン滞在中王立地學協會の幹事ケルチー氏と相識り、氏の好意の下に協會發行のジオグラフィカルジャーナル地理時報のバックナンバーを全部もらひ受ける事にした。これは今日でも教室に於け

る貴重なるコレクションの一つである。夫からこれもロンドン滞在中あだかもスコットの南極探検がイギリスを出發せんとした時に際會したので、自分は出帆當日ドックに碇泊した彼の探検船テラノバ號に赴き、握手して成功を祈つたが、その甲斐なくスコットの南極探検は南極を去る僅かの地點に於て挫折し、あたら雄圖を抱いて空しく南極の氷原に屍を曝した事は今尙痛惜に堪へない。大正元年の秋自分は歐洲各地の旅を終り、アメリカに渡り、西印度諸島を経て、更に當時工事中であつたパナマ運河の地帯を視察して、再びメキシコ灣を横ぎり、ミシシッピー河を遡り、アメリカに歸り、同年十二月無事歸朝する事を得た。大正二年に至つて、内田寛一君卒業して、翌年助手になつた。大正三年になつて、文科大學の陳列館が出来、史學科の獨立した研究室が又此處に附設せられ、階下東西の一室が地理學研究室に割當てられた。大正四年には田中秀作、遠藤金英兩君が卒業され、五年に文部省圖書課に榮轉した内田君の後を襲つて田中君が助手となつた。内田君の助手在職中、恰も日獨戰爭によりて我が有に歸した裏南洋群島に對し文部省から踏査員派遣の命があり、内田君が之を引受けて南洋に赴いたことがある。今教室の陳列室に残つてゐる裏南洋の土俗品がその時の土産である。

大正五年乃 大正五年には、獨逸のヘットナー教授が助手のシュミット、ヘンナー學士を連れて、日本至大正十年に來朝した。當時日本アルプスの梓川に於ける氷河遺跡の論争のあつた爲に、我國學

界の注意を惹いたが同教授と自分とはハイデルベルヒで知合であつた爲に、自分は二、三日六甲山や神戸附近を案内し、得る所も少くなかつた。

同年夏自分は瓜哇旅行の途に上り南洋諸島を旅した。

爾來大正十年小川教授の理學部へ轉任せらるゝ迄教授は教室の完成に努められたが、教授は持前の蒐集癖と研究心によつて教室の爲め種々の標本や貴重なる圖書の蒐集をせられて、我々後學の人々は之によつて現在非常な恩恵を蒙むつてゐる。而してこの間に教室としては下田禮佐君(大六)大塚會一郎君、勝田圭通君(大七)淺若晁君(大八)伏見義夫君、藤田元春君(大九)等が教室を巢立たれ、その中、下田君は田中君に踵いで大正七年より八年まで、又藤田君は下田君の後任として八年より十四年迄助手を勤務された。大正七年から八年にかけて自分は流感肺炎を病み暫く靜養するの止むなきに至つたが、同年秋頃には健康が恢復して京都帝大の教授を兼任するに至つた。大正八年には小川教授の外遊となり、自分は獨りで教室を守つてゐたが、十年の十二月小川教授が理學部に轉任せられて、教室は一時その主任を失つた。自分は本官の神戸高等商業學校の都合で十一年の八月漸く本學の專任教授となつた。併し種々の都合で、京都移住は後れた。當時の學生は小牧實繁、小野鐵二の兩君であつた。

大正十二年 大正十二年關東の大震災があつたが、その直前六月自分は出京して當時東京の書肆に

あつた全部の地質圖幅を蒐集して之が爲に危ふく焼失を免れ今地理教室の貴重なる文獻として残つてゐる。十二年の暮、陳列館東面の増築工事が出来たので漸く地理標本室一つを得て、今迄考古學の參考品との共同の室より別れて、地理專屬の陳列室を設け得るに至つた。

大正十三年

十三年自分は關東震災の跡を視察に赴き病を得、十三年より十四年にかけて半年あまり再び靜養する必要に迫られ、當時學生であつた塚本三溝の兩君を、屢々御影の自宅によんで講義をした事があつた。丁度この頃地球學團の創立が企てられ、小川教授を中心として理學部の中村教授や自分達が参加し、大正十三年の二月にはその第一號を發刊するに至つた。併し地球學團が理學部の地質學教室に置かれ従つてその所載の論文等も自然理學部系統のものが多く、この意味に於て文學部の地理學教室とは稍縁遠いものとして發達するに至つた。これが後年我が教室に於て地理論叢の刊行を見るに至つた一因である。

大正十四年

大正十四年の夏自分は一家を舉げて京都に移つたが、教室としては小牧君が藤田君に次いで助手となられ、當時二回生は廣瀬淨慧君一人であつた爲に特殊講義や講讀は二人で仲よく自分の室でやつた事を記憶する。同年十二月小川教授は理學部長就任と共に、授業時數を減じ、中村新太郎氏が之に代つて自然地理學通論を講ぜらるゝ事とな

つた。大正十四年三月小野鐵二君が講師を囑託され、専ら地圖學の授業を擔當した。

大正十五年 大正十五年に至り小牧助手は講師に任ぜられ主として講讀を擔當した。同氏は昭和二年研究の爲め主としてフランスに赴き四年十月歸朝された。助手は一時學外の吉

田敬市君を命じた。二回生は入江、岡本、松本の三君であつたが翌昭和二年には田中野中松下、宮川、村松の五君となり、地理教室は漸次繁昌するに至つた。これより先き大正十二年の卒業論文に於て小野君が自分の指導の下に大正九年の我國最初の國勢調査を地理學的に研究し、我國郡市別並に近畿地方市町村別人口密度を算出したが、この種の研究は我國に於て最初のものであつて、之を世に示す事は極めて緊要事と考へ、自分は柳澤保惠伯に願つて出版の費用を得、富山房から發行せしむる事とした。この出版は我國に於ける人口地理の最初の學術的業績であると自讃する事は必しも不當であるまいと信じてゐる。大正年代に於て京大地理學科の卒業生は中學教員として僅かに地理の免狀を有するに過ぎず、反對に西洋史の卒業生は歴史と地理の二免狀を併有するは不公平であると考へ、自分は時の部長坂口氏を動かして、歴史の免狀を得ることゝし高等教員も地理の外西洋史でも取り得ることゝした。同年には東京の報知新聞社によつて來朝した、極地探檢家アムンゼン氏を我が教室の肝煎りで、京大の學賓として迎へた事があつたが、當時自分は接待役として、親しく同氏と語らふ多くの時間を得た

昭和三
年
が、後年同氏はイタリー探検船ノルゲ號の救援に赴き北極に於て果敢なき最後を遂けた事を思ふと、前のスコット氏と共に探検家の最後を思ひ眞に感慨が深い。昭和二年から三年にかけて、東京新光社に於て世界地理風俗大系の出版を企て、自分に編輯員の依頼があつたので、自分は之によつて、地理學の普及化をなし従つて同學の士を多からしむる一助なりと信じ、欣然として之を諾した。後、改造社の日本地理大系、新光社の日本地理風俗大系の刊行に當つても、自分は如上の信念から兩者の編輯員となり、尠大なる三種の地理大系を發行せしめたのである。之によつて、一般江湖の地理學に對する興味を喚起した事は勿論、之を機縁として教室出身者に執筆の機會を與へ、我が教室の存在を世に知らしむる效があつたと思ふ。我が地理教室がこの前後よりその専攻者の増加した事も蔽ふべからざる事實である。

昭和四
年
教室に於ては昭和四年小野講師が地理學研究の爲、外遊せられたが、劃期的の變化はその年の暮、陳列館の新營第四期工事が出來之によつて、地理學教室は階下の陳列室の他、階上の實習室、二教官室、研究室、演習室を得て、教室として、一應の設備を完成した事である。昭和五年夏授業擔當の小川教授は停年を以て、退職したが、その記念論文集中文科に關するものは、地理教室に於て、編纂し、昭和六年之を世に送る事が出來た。この年地理の卒業生は岩根内田、太田、神坂、島瀧、本古澤、増田の八君で空前の多數であつたが、諸君

昭和六年
はそれ／＼その所を得て、研究を續けて行く事が出来た。この年我が京都帝國大學に於てはドイツと交換學生の制度が出来、最初に來朝したのは、フツパー君であつて、我が地理教室に學ぶ事となつた。我が國の大學に於てドイツから留學生の來たのは、恐らくは之が始つて、我が地理教室はそのレコードホルダーと云ふ事ができよう。而して教室にはその後、クンチエ、レオの兩ドイツ學生を迎へて、研究の國際化をなしたのは、眞に快心と云ふべきである。この年助手の吉田君が退職し、村松君之に代り、昭和六年に至つて小牧君は助教教授に任ぜられ、その年の卒業生は朝井、長谷川三友、米倉の四君であつた。

昭和七年
昭和七年に至り、村松助手は學習院に勤務さるゝ事となり、當時農學部に於て、干拓事業の研究をしてゐた、米倉君を助手に依頼したが、この年の卒業生は、再び八名の多數に上つた。内田、海老原、織田、櫻井、武別、吉田、渡邊の諸君がそれである。この數年來自分は地理學學生の支那旅行を必要と認め、四月東上の序を以て、外務省に赴き、時の對支文化事業部長坪上貞二氏に面會、研究旅行の必要を説き、事業部より旅費の大部分の補給を受ける事となつたので、この年の秋教室の大學院及現在學生等十三名、小牧助教教授引率の下に、北支那及新興の滿洲國を視察し、皆無事で歸還する事を得た。是より先き教室に於ては、毎年の卒業生が畢生の努力を拂つて作製する卒業論文が發

表の機關なき爲に空しく埋没する苦みがあり、他方一般の地理學研究發表の必要もあり、久しく機關雜誌の計畫があつたが、種々の曲折を経て單行本としての地理論叢を隨時發行する事となり、その第一卷は昭和七年の十一月に初めて世に現はるゝ事となつた。爾來今日迄冊數を重ねる事七、今後益々發展を希望する。本論叢の發行に就いては、自分は幾何もなく健康を害したので、専ら小牧助教授統率の下に、教室諸君の努力に俟つ事の多かつたのは、自分としては寧ろ感謝に堪へない次第と思つてゐる。

昭和八年

又この頃から東京の地人書館に於て地理學講座の發刊を企て、自分は小川、岡田兩博士と共にその監修の任に當つた。本講座は我國に於ける科學的地理學の最初にして、且最も大規模のものであつた爲に、自分等は先づこの組織の編成に苦心した結果諸分科を地理學本論と基礎論との二分となし、それ々々専門の執筆者を依頼した。之が最初の立案者は岡田博士であつたが、自分等はこれこそ眞に現在の地理學の本質を示す規範と考へて、賛成編纂したのである。この信念は今に至るも尙變る處がない。

今迄學内の研究に止めておいた地理學談話會は、之を公開して、盛んに地理學を宣傳すべしとの聲が期せずして教室内に高まつたので、昭和八年十月その最初の公開講演會を三條の大毎會館に開き、自分の司會の下に、田中、小牧、島の三君が講演を試みしに聽衆無慮二百、堂に滿つるの盛況であつた事は眞に快心の至りである。當日レオ君は母堂

と共にドイツ風景の活動寫眞を影寫してくれた事は錦上更に花を添へたものとして、又感謝する次第である。

昭和九年 昭和八年から九年にかけて、我が教室では小牧助教授と米倉助手が東照宮三百年祭記念會から研究の補助費を受け、近畿地方農村の歴史地理的研究に盡瘁する事ができ、別に小牧助教授は學士院より日本に於ける石器時代海岸地域の地理學的研究に就いて補助を受けるに至り、又最近には學術振興會の補助により小牧安藤大橋三君の名によつて近畿地方人口増減圖が出版されんとしてゐる。之亦教室としては、空前の事柄であつて、我が地理學教室の研究が大いに世に認識せらるゝに至つた事を證するものとして、自分も大いに悦ぶものである。昭和八年には岩尾川上野澤松井室賀の諸君と選科生の辻田君が教室を出で、翌年には、安藤、今村、大橋、日下、國領、近藤、朝永、村山、山口、渡邊の諸君が卒業され、地理教室は益々繁昌するに至つたが、自分は昭和九年春以來健康頗る不良となり、遂に久しく、病臥するに至つたが、教室外の諸君よりは手厚い御見舞を受け、て諸君の芳情に感泣すると共に、教室内の諸君はよく調和を保ち、熱心を缺かず、昭和十年には、荒木兼子、小葉田、谷淵、土田、西川、御子、柴村、本藪内の九君を世に送る事を得たのは、自分としても感謝措く能はざる處である。同年東京の岡田、武松博士が我が京大の地理學教室の學風に共鳴し、教室の爲め犠牲的に氣候學を講じて呉れたことは、又自分の

感謝する所である。今や昭和十年を送るに當り、自分の健康も稍良好となつたので文學部創立三十年式にも列し、地理學談話會の第三回大會にも出席の機會を得、その聽衆が又堂に溢るゝ盛況を見て、云ひ知れぬ愉快を感じてゐる。自分は今や月餘にして退職せんとしてゐるが、顧みて、過去三十年の教室生活を追想するに、自分は久しく兼任であつたのと健康常に不良であつた爲に、研究教授共事志と違ひ、その職責を盡し得なかつた事は甚だ忸怩たる次第である。それにも拘らず今回自分の還暦退職に就いては、教室諸君の絶大なる御好意を更に受けようとしてゐる事は眞に恐縮千萬と云ふ他はない。而して、最後に自分が教室の諸君に望む所は、我が教室は我國大學教育に於ける最初の地理學教室であるから、この誇を忘れず、教室の繁榮と發達とを常に念とせられん事である。これは教室に在るものと學外に在るものとを問はず苟しくも本教室出身者に對し均しく希望して止まない所である。

石橋博士論著目錄

明治三十四年八、九、十一月	唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て	史學雜誌十二ノ八、九、十一
同 年 十一月	白河關及勿來關	歷史地理三ノ十一
同 三十五年一月	勿來關 (櫻臺子)	歷史地理四ノ一
同 年三、四、五月	聖德太子十七條憲法評論	歷史地理四ノ三、四、五
同 三十六年九月	地學雜談——農業國と商業國 都會及港の發達 (稻湖生)	歷史地理五ノ九
同 年十一月	歷史つきの北陸の物産——武生の紙、九谷燒 正田の鮎すし (關山生共述)	歷史地理五ノ十一
同 年十二月	地學雜談——國境としての河流 日本の地名研究 (稻湖生)	歷史地理五ノ十二
同 三十七年一月	高岡の銅器 (稻湖生)	歷史地理六ノ一
同 年十一、十二月	地理學に對する支那人の觀念 (抄譯)	歷史地理六ノ十一、十二
同 三十八年十月	神戸港の今昔 (櫻臺子)	歷史地理七ノ十
同 三十九年三月	韓國商業の現状と其將來	學友會報第五號
同 年 九月	自然と經濟との關係	國民經濟雜誌一ノ四
同 四十年三月	テワンテベツク鐵道の完成	國民經濟雜誌二ノ三
同 四十一年一月	滿洲に於ける日清人の爭衡	學友會報十四號
同 年 二月	港の盛衰	地學論叢三

- 同 四十二年四月 努力の地的分布
國民經濟雜誌六ノ四
- 同 四十四年六月 獨逸地理學界消息
藝文二ノ六
- 同 年 九月 本校の標語について
學友會報(四四、九、二九日發行)
- 大正 二年 五月 巴奈馬運河開鑿と我國運 (稻湖生)
藝文四上ノ五
- 同 年 八月 氣候と世界經濟
國民經濟雜誌十五ノ二
- 同 年 九月 人口集中に關する新定律
國民經濟雜誌十五ノ三
- 同 三年 二月 運河の發達と巴奈馬開鑿の意義
神戸高商第十周年記念論文集
- 同 年 七月 葦合思潮の一潑沫 (茅海漁人)
學友會報(三、七、一八日發行)
- 同 年 九月 武庫附近聚落の變遷
地人叢書 都市と村落
- 註——大正十五年一月、西宮町教育會編「西宮町誌」に附録として
- 轉載せられたるものあり(四四七—四五五頁)
- 同 歐米に於ける人文地理學とその研究法
地人叢書 都市と村落
- 同 郷土保存に就いて
史的研究
- 同 年 十二月 獨逸に於ける戰時經濟の研究に就て
大阪銀行通信錄二〇七
- 同 四年 十月 創業の意義と學生らしき素朴
學友會報(四、一〇、二五日發行)
- 同 五年 四月 布哇、白耳義、香港、歐羅巴
經濟大辭書第四卷(月文館版)
- 同 六年 七月 瓜哇の氣候と住民の生活
史林二ノ三

同	七年一月	有史時代の氣候變化
同	八年十月	内田先生の追憶
同	九年一月	獨逸領土變動の意義
同	十年六月	戰後に於ける國際貿易の趨勢
同	十二年三月	神戸港外國貿易の變遷 (神戸市史別録二)
同	年四、七月	維新前後に於ける外國貿易に就て
同	十二年九月	復舊か改造か
同	十三年六月	明治年間の外國貿易に就て
同	年七月	アナポリス鑛泉と六甲炭酸水
同	十四年三月	大日本都市別人口密度圖の刊行と人口分布圖の作製に就きて
同	年四月	工場地の選定と電力問題
同	年六月	經濟地理上より見たる日本工業の將來
同	十五年七月十一日	アメリカ發見前後の地圖地球儀とジバンゲ
同	年十、十一月	我國の人口集積と國策
同	年十一月	同上
昭和	二年一月	本邦の人口集積と國策
同	三年七月	極地探檢の意義

歴史と地理一ノ三

藝文十ノ十

史林五ノ一

神戸高商商業研究所講演集二

史林八ノ二、三

大阪朝日新聞一二、九、二七—三〇日

國民經濟雜誌三十六ノ六

地球二ノ一

小野鐵二著

大日本都市別人口密度圖解説

工業之大日本二十五ノ四

工業之大日本二十五ノ六

史林十一ノ三、四

國民經濟雜誌四十一ノ四、五

神戸高商商業研究所講演集三〇

工業六
大阪朝日新聞三、七、十、十二日

- | | | | |
|----|------|--------------------------------|-----------------------------------|
| 同 | 四年三月 | 南洋、沿革及現状 | 世界地理風俗大系第四卷(新光社版) |
| 同 | 四年四月 | イギリス、産業と交通 | 同 第十卷 |
| 同 | 四年七月 | 中米、地理的特徴、沿革現状、パナマ運河、西印度諸島 | 同 第十八卷 |
| 同 | | 兩極地方の經濟的價値 | 科學畫報十三ノ一 |
| 同 | 九年九月 | 中等教育に於ける地理教授に就て | 自然科學四ノ二 |
| 同 | 十年十月 | 東海地方 沿革(池田源太共述)人文、志摩半島(村松繁樹共述) | 日本地理風俗大系第五卷(新光社版) |
| 同 | | 近畿篇 近畿地方の人文地理 | 日本地理大系第七卷(改造社版) |
| 同 | 五年八月 | 四國及瀬戸内海、四國人文總説 | 日本地理風俗大系第十一卷 |
| 同 | | 九州篇 人文總説、人口及聚落 | 日本地理大系第九卷 |
| 同 | 五年十月 | 政治地理學と地政學 | 地學雜誌四十二ノ五百 |
| 昭和 | 五年十月 | 九州地方聚落の人口地理的考察 | 小川博士還曆紀念史學地理學論叢 |
| 同 | 六年一月 | 北極地方 總 説 | 世界地理風俗大系第二十四卷
(新光社版) |
| 同 | 二年二月 | 近畿地方(下) 神戸市 | 日本地理風俗大系第九卷 |
| 同 | 四年四月 | 中央アジア、人文 | 世界地理風俗大系第六卷 |
| 同 | 五年五月 | 中國四國篇 中國地方概説、四國地方概説 | 日本地理大系第八卷 |
| 同 | | 獨逸と地理學 | 地理二ノ三 |
| 同 | 八年六月 | 人口地理學 | 地理學講座第六、八、十一、十四、
十五、十六回(地人書館版) |

同	六年八月	總論篇 人文地理總説、世界に於ける日本
同	年十二月	政治地理學上より觀たる滿蒙問題
同	七年一月	明治初年の外國貿易に就て
同		我が地理學觀
同	八年六月	聚 落 地 理 學 村松繁樹共述
同	七年十二月	人口の分布 人文地理
同	八年二月	郷土教育の發達
同	年 四 月	地 理 學
同	年 六 月	人文地理學概論
同	九年一月	近 畿 の 工 業
同		南部アジヤ概説
同	年十一月	北アメリカの概説、カナダの自然人文 ニューファンドランド島
同	十年八月	阪神地方の水禍に就て

別枝篤彦共述

日本地理大系第二卷

れきしとちり四

歴史と地理二十九ノ一

地理論叢一

地理學講座第十五、十六回

大百科事典第十三卷(平凡社版)

れきしとちり七

大百科事典第十七卷

地理學講座第十六回

地理講座日本篇第三卷(改造社版)

地理講座外國篇第三卷

地理講座外國篇第八卷

大阪朝日阪神、神戸版
一〇、八、三、二四日

以 上

石橋先生の還曆に因みて

石橋先生に關する感想

中野竹四郎

吾等が初めて先生の講義を聴いたのは、明治四十一年、史學科開設第二年目であつて先生がまだ神戸高商教授で本學助教授を兼務して居られた頃であつた。普通講義は人文地理學概論、特殊講義は交通地理學であつた。先生當時まだ三十歳を超されたばかりの青年教授で該博なる知識を傾け元氣よく而かも親切に講義されたものである。當時史學科二回生が今の西田直二郎教授を初め十一人、それに一回生は東洋史の有高君と僕との二人に過ぎず、其内、地理學專攻者は二回生に寺田・樋口の二君、一回生では僕一人といふ少人數であつた。當時史學科學生中には随分變つた人も居て突飛な質問を飛ばして先生を御困ませした者もあつた。僕等が講義を聴いて一年半餘りで先生は海外留學に出られることになり、一、二回生が下鴨の某料亭にて先生の洋行を盛にする爲め小宴が催され、種々の餘興があつたが僕も其席で未熟な薩摩琵琶「送別」を吟したことを記憶してゐる。當時の史學科生は右のやうに少數な爲に學生相互の間は勿論、先生との間も極めて親密で打解けて御話を伺つたものである。短期間ではあつたが吾等の先生から受けた感化は、學問上は勿論修養の上にも甚だ偉大であつた。當時の學生は卒業後學校方面を多く希望したので先生は吾

等に學校方面ばかりでなく、他の方面にも活動すべきであると仰せられ、僕は卒業論文に滿洲地理に關したものを書いたので、當時滿鐵から人を求めて來て内藤湖南先生の推薦によつて遂に滿洲入りをしたのである。先生の留學地獨逸へ御願ひして新刊書を送つて戴いた御溫情も忘れ難い記憶の一である。

先生は門下生の卒業後も何くれと親身に御世話下さることは誰しも普ねく知る所であつて、僕も滿鐵を十二年勤めた後、先生の御推舉によりて長崎高商に赴任することが出來たのである。其後幾度も一身上に關し並々ならぬ御心勞を掛けて今日まで大過なく過したことは、全く先生絶大の御指導御盡力によるもので感激に堪へない所である。先生は何時訪問しても御病氣でない限り、否な時としては多少御氣分が勝れぬ折にも、常に溫顔を以て迎へられ色々學問上の事ばかりでなく、處世上尊き御教訓を賜はつたことは數知れぬ有様である。殊に手紙を差上げた際には遲滞なく御懇篤なる御返事を戴くことは終始渝らず、其の御几帳面さに感佩してゐる次第である。

先生は清く正しく而して強く世を渡られる。而かも謙讓の美德を備へて人と争はれないが、正義の前には何物にも屈せられない稜々たる氣骨を包むで居られる。先生は日本に人文地理學の礎石を据ゑられ、幾多の人材を我等の教室から學界其他に送られた地理學界の大恩人たると同時に、大人格者として門下生に偉大なる精神上の感化を與へられた。特に吾等の敬仰に堪へないことは、十數年來先生が病魔と闘ひつゝ學問に精進せられ學生を指導して倦むことを知られない氣力の旺盛さと其氣魄の崇高偉大なることである。右は先生の偉大さを示す一片鱗に過ぎず、意の盡さる所は御宥恕を請ふ次第である、終りに臨み先生の御健康を祈つて擱筆する。

神戸凌霜會主催石橋先生座談會の概況

田 中 秀 作

昭和十年九月四日夕、神戸商大凌霜會館に於て同會主催の石橋先生に關する座談會が開催せられた。之は近く還曆を迎へられんとする先生の公私あらゆる方面の事項や各自の所感を話し合つて記録に止めて置きたいとの趣旨によつたのである。集まつた人々は商大に於ける同僚や門下生として瀧谷、丸谷、花戸、平井、水谷の諸教授、實業家の竹田、北濱、吉田、田中(守一)、瀧川、矢頭の諸氏であつた。會員外である筆者も招かれてオブザーヴァーとして聴取することが出来たが、左記は其の時の話の概要である。限られた誌面のことでもあり座談の順序に詳述するを避け細目別に概括的に報告することにする。

一、専門の學術方面

本邦地理學者中文科的出身者として人文地理學特に經濟地理學を建設せられた功績は偉大である。

講義には常に力が入つてゐた。地理學の基礎的知識として天文學や地形學に關する事項なども興味深く話されたが、自然と經濟との關係が最も御得意のやうであつた。

經濟地理の統計の細かい數字を列舉せられ試験の際には相當に困難であつた。

地理學者でありながら經濟學、商業學等の研究を怠らず、世界及び日本の貿易に關する研究の如きは内外の斯學専門

家も敬服してゐた。維新以後の本邦の對外貿易に就ての論文は獨逸キールの世界經濟研究所の紀要に轉載せられた程である。

先生の學究的態度の眞剣なるは常に同僚や學生間の畏敬の的となつた。學生引率の修學旅行の際汽車にも一抱への風呂敷包中に参考書類を携帶せられ他人が雜誌に耽る間に研究せられたのを見受けた。

二、専門外の講義方面

高商創立後數年間經濟地理學の外に倫理を擔當せられ或は英語の教科書を用ひ或はノートにて西洋の倫理學説を講義せられた。

倫理教授の際よく自己の體驗を話され身を以て道德の範を示された。

先生の學生時代から蒐集せられた格言集を折に觸れて提供せられ處世上の教訓に利用せられたが、其中には今尙吾々の記憶に残つてゐるものがある。

先生は倫理教授の適任者であつたことは専門的學究の優秀者たりしこと、共に水島校長が特に來任を懇望せられた所以であつたと思はれる。先生は實に創立當時に於ける本校德育の中心として重きをなして居られた。

三、學友會關係其他

明治三十七年には講演部長を同四十年には興風部長を、大正三年には編纂部長を命ぜられ學友會の爲に盡された。就中興風部長として最も輝かしい功績を残された。

興風部の一事業として學校構内に伊藤、隈本二氏の篤志寄附金を以て學生會館を建設し之を以て學生の修養娛樂の

場所とせられた。

本校に標語を定めることが問題となつた際に「眞面目」をモットーとすべしと主張せられた。蓋し如何なる徳目を表する語よりも大實業家を養成する本校の標語としては此の語が最も適切なりと信ぜられたからであらう。之に就き屢々講演會の席上又は學友會報に意見を發表せられ、後に海外御留學中の書信にも其の必要を力説せられた。

東亞研究會を創設せられ學生有志を其の會員とし朝鮮、滿蒙、支那の經濟事情の研究を指導せられ自らも屢々研究を發表せられた。先生の熱心なる盡力によつて伊藤忠兵衛氏より寄附の壹萬圓を以て基金を作り之が利息を以て毎年學生若干名を支那南洋印度等へ旅行調査せしめ同時に日本商品の宣傳をなさしめることになつたが之は今尙繼續してゐる。

四、性格、保健等に關すること

先生は講演に長ぜられ御身體に似ず力が入つてゐた。又座談が巧みで話題が豊富で訪問しても客に話す機會を與へられざる程次から次へと話された。先生の常識が廣く豊かな爲である。

先生は其の一舉一動に常に細心の注意を拂はれ何事をなすにも合理的であつた。

先生は性來蒲柳の質であつたので保健には不斷に注意を怠られなかつた。茶や珈琲の如き刺激性の飲料を絶対に取られず、常に白湯を用ゐられることは周知の事である。

四十歳以後は身體の鍛鍊といふよりも消費を避け保存休養の必要なることを力説せらる。御病床中も科學的合理的療法を守り信仰的療法等は排斥せられた。

留學の際は學生一同先生の健康に就て不安を感じた程であつたが、よく保健に留意せられ健康體を以て無事歸朝せられたのには皆驚いたものである。

五、結 語

先生は學徒として教育者として常に最善の努力をなされ又それを無上の喜びとされてゐた。細心、緻密、眞面目、圓滿で常識に富まれ合理的で日常生活にむだのなき人と言ふことを得よう。

人情味豊かな石橋先生

勝 田 圭 通

東洋のラツツェルとも稱すべき石橋先生が本邦人文地理學の創始者であり建設者であることは今更言ふまでもないが、在學中兎角不勉強であつた私は卒業後は畑違ひな方面に向つた爲、學問上に於て先生との交渉が比較的少なく、従つて私は此の方面に關する先生を語る資格がない。それは其の道の適任者に譲ることとして、一言學術方面以外に於て先生の人情味に富まれる點を指摘して見たい。

私の見る所では學究上に於て冷靜鋭敏な先生としては全く意外に思はれる程溫情たつぷりな所がある。併し此の方面でも學問に對すると同じ様な先生獨特の緻密さは窺はれ、不斷に門下生の個性を精細に知つて夫々の人に適する様な仕事や地位を仕向けられる。一體世間で良教育者を以て任ずる人でも自分の受業生各人の個性を正確に見ぬくと言

ふことは至難なことであるが、先生は教室や研究室に於てのみならず、訪問時の態度や書信の書き方等にまで常に注意せられてゐるとのことです。平素から此の方面では極めて無頓着に振舞つて來た私は後に聞いて全く恐縮してゐる程である。

かくて適材を適所に向け絶えず激勵して地位の向上を圖る様にせられ、殊に實力があつても不遇な者に對しては何とかして打解好轉策を講ぜられてゐる。就職や榮轉の好機を取逃す虞れのある場合又は一刻を争ふと言ふ際など御病床から自ら書翰や電報を認められたことも實に一再ではないさうである。更に門下生の家庭上のことや結婚其他のことにも立入つて斡旋せられた例も頗る多いが、先生としては眞に止むに止まれぬ人情味の發露に外ならないのであらう。

今や先生は比較的御弱體でありながら人生の平均年齢を遙かに突破して御芽出度も還曆を迎へられ正に壯者を凌ぐの概を示されてゐる。先生と同じ様な學者で壯年の頃から健康を以て誇りとした人々が還曆に達するか達せぬかで相踵いで物故してゐるが、此の點では先生は最後の優勝者で柔克く剛を制し洵に慶びに堪へないと同時にいつまでも其の壽を全うせられ門下生の指導に御盡瘁せられ其の間に學者石橋先生と共に人間石橋先生の面目が益々躍如として輝く様切に念願して已まない。

尙此の機會に先生の令夫人に就いて私の感じたことを述べて見たいと思ふ。多年藥餌に親まれてゐる先生に仕へる令夫人の優しい、眞劍な、而も雄々しい態度にはいつも私は心を打たれてゐる。私には令夫人は先生に對して總てを犠牲にし一身を捧けても尙足りないと思はれ今日稀に見る婦徳の高い方と心から尊敬の念が起るのである。

先生の御健康が斯く保たれるのは先生の御體質や先生御自身の周到なる御養生に因る事は勿論であるが、一面賢夫人の此の犠牲的奉仕が非常に與つてゐると想像するのは必しも私一人のみではないであらう。されば吾々が先生から受けた徳化や學問上のことは固より夫れ以外の事に於ても其の幾部分は令夫人に負ふ所が多い事と私は常に信じ衷心より感謝の意を表する次第である。

調和景觀のために

小 牧 實 繁

古代地理的知識の限界が狭かつた時代から大探検大発見の時代を経て現今に至つては世界の殆んど全部が明かにせられ探検の事業は既に終りを告げたかに考へられ、僅かの期間に世界を一周した者でも何かその隅々までを見盡したかに感じて世界にももう珍らしいものはさう多くは残つてゐないと思つたりする、近代の交通機關を利用して都會地ばかりを巡歴したのでは大阪も紐育も京都も巴里もさう大して違つてはゐないと感ぜられもする、これは確かに誤りではあるが、汽車の沿線だけを見て歩く國內旅行が全く詰らなくなつて來たことも事實である、併し一たび沿線から離れて深く僻遠の土地に踏み入つて見ると同じ日本にも尙かやうな風物が残されてゐたかと珠玉を拾ひ得た喜びを感じることも稀ではない、觀光地や史蹟名勝地もさることながら隠れた自然の風景やゆかしい民俗などを發見し得た瞬間の我々の喜びは喩へやうもない、矢張り日本に生れて來てよかつたと感ずる我々の幸福は大きい、かうした意味で

未だ荒されてゐない僻陬の然し調和のある土地自然や人間文化の全體は國寶以上の國寶であるとも言へる、蕃社の神聖を意味なく博覽會に持ち去つたり飛驒や近江の圍爐裡などある古民家を何のゆかりもない都會地の別莊に移し去つたりなどすることをせず願はくは調和ある景觀のうちにこれを保存することに心懸け度い。

若し私がかうした問題に興味をもちかうした問題に眼を開くことが出来たとすれば、それは凡て石橋先生の賜物である。史蹟名勝天然記念物乃至は風景の保存、一言にして蔽へば郷土保存に就いての先生の先覺者としての御功績を世人はややもすれば忘れ勝ちであるが實は先生は既に大正元年から大正二年頃にかけて郷土保存の必要を力説なさつてをるのである。私が大學に入學したのは大正八年であるが既に二回生の時即ち大正九年九月八日に「郷土保存に就いて」と題する先生の御講演の要旨が収録せられてゐる史學研究會編纂の「史的研究」を丸太町の古本屋から買つて来て、未だ暑い頃であつたが、熱讀してゐたのである。爾來此の方面に對する私の興味は少しも衰へてをらぬ。若し私の精力が許すならば私は此の方面に於いても出來得る限り先生の御素志を繼ぎ行き度いと常々念じてゐる次第である。

(昭和十年十一月十一日)

一番感銘した御教訓

小 野 鐵 二

私が文科へ入つて教を受けた時から今に至るまで、石橋先生は始終割合に私の身近にいらつしやる先生であり、大先輩であつた。今後とてもさうであることに變りはないが、此までさうして割合身近に先生を感じてゐた私として、先生に關する事柄を書くとなれば、其こそ何でもとまではゆかぬにしても、随分いろ／＼と記すことはありさうである、さてとなると、其でもない、此でもないといふ氣持である。一つには近いためにベースクチャグがつかねるからでもあらうし、また書くべきことの選擇が拙いからであることは勿論である。いくら考へてもはてしがないので、先生から頂きたいろ／＼な御教訓のうちで私の最も肝に銘じて來たことを記さして頂かう。

先生が物をお書きなると、一字一句でも苟くもされないといふことがわかるが、ある時いろ／＼なお話の間に、物を書く時には、徹底的に其に關係した事を調べたいものだ、詳しく研究しておくのがよいことだと諭された。私はその時も勿論先生のお考は御尤もだと思つたが、この教訓のもつと深い味を段々と知るやうになつてきたのは、その當時よりは後になつてから、調べの不充分のために内心疚しい講義をせざるを得なかつたやうな體驗を繰返した時分のことである。私は今でも先生のこの御教訓を、先生が含蓄せしめられた意味で悟り盡してゐるとは負け惜みにも思つてはゐない。或は一生、この貴重な御教訓を、本當に實踐できずに死んでしまふのかもしれない。願ふところは、一

歩でも一尺でも、諭された御趣旨の指す方へ進みたいといふことだけである。

右の御教訓は、此を擴充すれば生活態度そのものにも適用されると思ふ。さう考へると先生のこのお諭しは、私にとつてはくさくさの御教訓のうちで、いよゝ一番有難いものうちへ入るのである。

かうして書いてゐると、どうやら外にもまだく書いたことがあるやうな氣もしてくるが、其ではきりもつかないし、此だけで失禮させて頂きます。

石橋博士の還曆を祝ひて

宮 川 善 造

石橋先生がこの度還曆を迎へられたのはまことにお目出度い。あの蒲柳の質を以て、また常に病魔に襲はれ乍らも遂にこの榮譽を獲得されたのは驚異的事實だと云ふ人があるかもしれないが、私共の様に先生の聲咳に接しその日常生活を知る者は夙にこの歡喜の日を期待して居たのである。

先生の御養生は實に周到であり科學的であつて、例へば御部屋の中には寒暖計と濕度計がかけられ常に氣温と濕度の變化に適應せる御處置がとられて居たのである。それにも拘らず底冷のひどい冬が來ると餘儀なく御休講されたが尙、演習は御自宅で續けられ私共は、吉田二本松の御宅へ通つた。私共が外國雜誌の論文を紹介したり自作のものを發表したりする時、先生は其内容の各部分にわたつて、御講評下さるだけでなく、發表の順序、態度、時間などに就

ても一々御注意された。而して論文の作成や批判の際には一面的でなく常に全面的、綜合的立場に於て之を爲すべき事を教へられた。

先生の普通講義たる人文地理學概論はラツチエル流の地人相關的思想に立脚して自然環境の人類に及す影響を諄々と説かれたもので、史學科一回生にも理解し易く頗る好評を博し、また特殊講義に於ては經濟地理或は交通地理の題目の下にその蘊蓄を傾けられ古今東西の例證を擧げて相關的原理法を説明された。

先生は人文地理學者であるが人文現象を、研究對象とする場合にも常に自然環境の影響を看過されず、私共が卒業論文作成の際に、石橋先生より地質、地形、氣象關係方面の御指導を多く賜つたのは、小川先生より聚落、歴史關係の御教示を仰いだのと好對照であつたが、これも後に、先生が獨逸御留學中、特に自然地理的研究に力を注がれたと知つて成程と肯かれたのである。

先生が我が國に於ける人文地理學、經濟地理學樹立のために、また地理教育發展のために貢獻されたのは贅言を要しないところであるが、特に先生の地人相關的思想の及ぼせる感化は偉大なものがあると云はねばならぬ。

先生は最近甲南の地に専ら御靜養の由承るが冀くは向後益々御自愛の上、斯學の研鑽に盡され、また私共の上にながく御薰陶を賜らん事を祈るものである。

石橋先生の御高德の一斑

村　松　繁　樹

この拙き一文は私が石橋先生の御高德の一斑を廣く御紹介申上べく先生の御還曆記念論叢に執筆した小篇のはしがきとして書いたものであるが、餘り長くなつたので與へられた頁數を超過する嫌があつた關係から、はしがきは單に要項に止め、本會誌の餘白を借りることにしたものである。

恩師石橋五郎博士が芽出度御還曆の壽をお迎へになつたことは、我々門下生にとつては眞に限りなき喜である。平素ともすれば御病氣勝であつた先生のこと故、われ々は常々先生の御健康をのみ祈念してゐたのであつたこととて、なほ更衷心なる喜に耐へない。我々にとつて大きな悲しみ——京都帝國大學文學部教授の御逝去——のあつた時毎に、先生御自身は『自分は更に弱いのであるから』とか『とても還曆まではつとめることは出来ないだらう』とかお漏らしになつたことが、未だ耳底に残つてゐた私には、爰に芽出度現職のまゝ御還曆をお迎へになつたことを幾重にも嬉しく感ずる次第である。

思へば先生の御病氣勝であらせられた大きな理由の一は、先生がわれ々門下生のことを日夜念頭に置きたまひて公私に亙る御配慮を忝うしたことにもあるのではなからうか。御面會を許されて御病床の御枕邊に侍るわれ々にお

話になるそのことも、悉門下生に對する御高配のお言葉であつた。これはわれ／＼門下生一同の深謝措く能はぬところであるが、私が未だ教室に御厄介になつてゐた頃、獨逸からの留學生に對しても同様の豊かなる御愛情を垂れ賜うたことは未だ餘り知られてゐないこと、思ふ。

それは昭和五年、大阪毎日新聞社の盡力によつて、獨逸ライプチヒ大學から第一回日獨交換學生として來朝したクリスチアン・フツパー君に對して、ある。フツパー君は體育學と地理學との専攻であつたが、京都帝國大學では文學部の地理學教室に來たことは、彼の専攻に最も近かりしこと、彼のドクトル論文を日本の地理に關して纏めあげようとしたからであらう。彼が始めて地理學研究室へ來て、石橋先生と彼のテーマに關して御相談申上てゐた光景は、今猶ほあり／＼と想ひ浮べることが出来る。フツパー君は、第一回日獨交換學生たりし使命の自覺よりも來てゐたらう、初め日本の風土が日本人の生活、特に精神生活に如何なる影響を與へてゐるかに就いて研究したい希望を有してゐたもの、如くであつたが、彼の在留期間が一ケ年と云ふ短い豫定であつたのを御顧慮になつて、彼が經濟地理にも興味を有つてゐた關係から「日本固有工業」に就いての研究をお勧めになつた。

斯くてフツパー君のテーマはきまつたのであつたが、何分獨逸から初めて日本に來た彼のこと故、日本語はもとより出來ず、日本の事情にも通ぜず、況んや研究に必要な日本の歴史に就いては殆んど何等の知識がなかつた。其處で先生はフツパー君のために、獨逸語で基本事項に就いて特別の御講義を下されたのであつた。野外には私が案内することになつたので、私も亦其の御講義に列するの光榮を許されたのであつたが、此の野外調査に關しても少なからぬ御配慮を彼フツパー君に與へられたのであつた。即ち大阪毎日新聞社から提供された學資は、彼の語るところによる

と一ヶ月百圓であつた。従つてそれで研究生生活の費用を辨するには一杯で、其の中から旅行費を出すのには不充分であつた。従つて多少の収入のあるように、幸ひ彼がスポーツ・レーラーであつた關係上、其の方に適當な口を見つけ、御骨折があつたが、さしづめとして野外調査は大學から補助して頂けるやうお取計ひになつてゐたことは、研究室の電話口で御交渉になつてゐた先生のお話で知れたのであつた。

研究室に關しても、當時階下の舊室に在つた實習臺のみ置かれてゐた只今大學院學生の研究室になつてゐる室に、彼のために特別に机を設けられ、多大の便宜が與へられたのであつた。不完全な暖房装置しかあり得ない白川の下宿に於ける冬の寒さに耐へかねて、ステイムの傍に紫煙をくゆらせ乍ら讀書してゐたフツパー君の姿が今猶ほ眼底に映ずる。彼と共に秋晴れの日綾部の郡是製絲工場を訪れたことや、丹波の農家を訪れて養蠶の状況を見たこと、伊豆の震災地踏査の歸途静岡の漆器工業を見學したことや、レオ君もつれて西宮に酒造家を訪れたこと等も今猶ほ記憶に新たなるものがある。

斯くの如くして彼の論文が進行するようライプチヒ大學のフォルツ教授と連絡をとるやうに御注意があつたりしたが、彼フツパー君はやがて何時の間にか教室へも顔を出さないやうになり、留學期間たる一ヶ年が経つても不幸にして彼の論文は完成するに至らなかつた。

彼が甲南高等學校に教鞭をとつてゐることを聞いたのは、其の後やつとしてからのことであつた。日本を研究に來た彼が、そしてあらゆる日本のことに通曉したかつた彼が、それから五年経つた今日、未だに日本に往つて獨逸に歸らぬのは、それ程日本が好きになつたのであらうか。それにしても、折角先生が手を引くが如く教へられ、種々の御

便宜を與へられたテーマが纏まらずにあることは、甚だ残念に耐へない。

今回、石橋先生の御遠曆を迎へるに當り、私は未だよく知られてゐない一外人留學生に與へられた先生の御恩情を御紹介すると共に、當時協力した私の手になつた草稿に加筆して甚だ遅ればせ乍ら、謹んで先生に呈上する次第である。

卒業後の感想

島 之 夫

昭和五年の春、京都帝國大學文學部史學科を地理學專攻で卒業してから早や六年目である。在學中は實を言へば不勉強で石橋先生に叱られたこともある。三回生の時、京都の下宿を引あけて蘆屋の自宅から一週間に一回の演習に出席したのみであつた。卒業論文が「六甲山塊南北の比較」といふ題目だつたので、研究調査の爲めには蘆屋の方が都合だつたが、結局はのんきな大學生だつた。私を京大の地理學教室に紹介して下さつた甲南高校時代の恩師伏見先生(現長崎高商教授)に對しても誠に相濟まぬ次第だつた。當時月曜日の午後が演習の時間で同期生は八名だつた。だから演習といつても確か二度か三度廻つて來ただけで、そのほかは只出席して他人の話を聞くだけである。勉強すればすることは幾らでもある筈だが、サボればまた幾らでもサボれた譯である。今から考へれば確かに先生に對して相濟まぬ態度であつた。

それでも在學中に一つだけ私の一生に大きな影響を及ぼした事柄がある。それは二回生の時の四國方面への修學旅行である。當時は石橋先生御不快であり小牧先生は歐米留學中で、修學旅行といつても助手の吉田氏を先頭に三回生と二回生の十名許りの連中である。學生ばかりでは只遊び半分に金を費して來るだけでは困るとの御心配からと思ふが、石橋先生から夫々に研究項目を分擔しその報告を提出せよとの御命令が出た。私は當時三回生の村松繁樹氏（現學習院教授）と組んで聚落の調査に當つた。

室戸崎に上陸して其處にある家屋が小さくて庭も無ければ塀も無いのが異様に感じた。更に屋根の上に漁撈用の網が張つてあることや板圍ひの腰板にコールトールの塗つてあることに注意が惹かれた。此の地の氣候や産業上の特殊性と結びつけて考へて見る時に何か大發見でもした様に思ふのであつた。所謂地人相關の理法を實例によつて示されたのである。風が強いから屋根の瓦が飛ばない様にと網の古いのを利用して屋根を抑へてあるのだ。潮風にあたつて吹き降りの雨に濡れて、木が腐らない様にと、船底へ塗るコールトールを板に塗つてあるのだ。そんなことを獨りで判斷してゐる時の氣持良さは所謂藝術家や學者のみが味ふことの出来る、何とも言へぬ愉快さであつた。

その時に考へた。俺は一つ家屋の地理學的研究をしてやらう。各地の家屋が異なる所以を地理的に解決して見よう。未だ誰も手がつけてゐない面白いアルバイトがある、といふ風なことを考へた。

中學生の時に地理の時間に聞いた話が今でも頭に残つてゐる。曰く「家屋の屋根の勾配は雨量の多少に比例する」「これは大阪府立北野中學校の山本荒吉先生のお話だつた。「雨が多ければ屋根の傾斜は急で雨が少ければ傾斜はゆるい」誰にでも分り切つた様なことだが、それなら屋根の傾斜度と降水量とは、數量的に正比例することがはつきり言へる

か。

そこで先づ屋根の傾斜を計つて見る。各地でいろんな屋根を採集して側面からその寫眞を撮る。その寫眞を分度器で計つて三十二度とか三十五度とかいふ角度を出し(屋根の面が水平面と作す角度を指す)その地の年平均降水量との相關關係を調べて見る。ところが屋根の材料や相異や形式の差があつて、はつきりしたことは仲々言へない。それで今度はうんと降水量に差のある地方の屋根を集めることにした。ところが色々本や寫眞帳を見ても屋根だけ撮つた寫眞は無し、たとへ有つてもその傾斜が計れるやうな圖は殆んど無い。そこで自分で出かけて行つて寫眞を撮らうと決心した。これぞ卒業後今日に至る私の研究題目たる「民屋の地理學的研究」の發端である。

卒業した春に丁度都合好く大阪府立高津中學校に奉職することが出來た。高津中學校長羽生隆氏はいろんな機會に研究旅行に出る便宜を與へて下さつた。

昭和五年の夏休には口支周遊團に加つて大連・北平・上海・臺灣へ旅行することが出來た。その時の記録は教育時報(大阪府教育會)第二十八號に掲載しておいた。

昭和六年の夏休には一人で樺太の敷香まで北上した。途中奥羽地方・北海道地方を見學することが出來た。そして東北日本に於ける木造の民屋を見ることが出來、深雪地に於ける特殊な家屋構造に就いて學ぶところがあつた。この見學に關しては大阪府立高津中學校校友會雜誌の學藝誌上にその一端を記しておいた。

昭和七年の正月の休みには能登半島をこれも一人で一巡した。この年地理論叢が初めて發行されたので「能登半島

の民家」なる資料をその第一輯に掲げることが出来た。

昭和七年の夏休には中等學校地歴科教員協議會が京城で開かれるのを機會に朝鮮半島及び滿洲國の間島地方迄足を延ばすことが出来た。この旅行の收獲は地理論叢第二輯に發表することが出来た。即ち朝鮮の民屋は大別して草葺屋根のものゝ瓦葺屋根のものにすることが出来るが、此の二者の分布は内地に見られる様に田舎と都市の區別ではなくて南鮮と北鮮に分れる。即ちその氣温が稻の栽培に適する南鮮には草葺民屋が卓越して存在し、稻の耕作の出来ない北鮮では瓦葺民屋が多いことが判然とした。此處に屋根の材料は貧富の差に依る社會的原因よりはむしろ材料の有無といふ地理的原因に依つて決定されるといふ簡單ではあるがはつきりした事實が證明されたことになる。

昭和八年の夏休には比律賓群島及び裏南洋の日本委任統治地へ約一ヶ月半の洋行をすることが出来た。これには大きな理由と目的とがあつた。即ち過去三ヶ年間に於て先づ日本より南西方へ、次の年には日本の北東部へ、更にその翌年には日本の北西部及び北西方へ旅行した結果、日本群島の附近は一通り見たことになるが、只南東へ向つては一寸行き難いのであつた。そこでどうしても南東へ向つて即ち太平洋へ出掛けて見たかつた。

日本の民屋を研究するには、どうしても日本内部のみでは不充分であつて、日本の四圍を研究することが必要である。簡單に言へば、日本の民屋は大陸の影響と南洋の影響とを併せ受けてゐる。それで南洋の民屋を調査するために船に乗つて南の海へ船出したのである。何時もの旅行は勿論汽車の三等でしかかも大抵宿賃を節約するためには夜行列車を利用して行く場合が多かつた。敷香からの歸路も、間島からの歸路も車中でぶつ通して五日間暮してやつと蘆屋へ歸りついたものである。今度の船の三等船客は汽車の場合に較べて一層辛かつた。濁つた水を飲み、一ヶ月餘も眞

水の風呂に入ることが出来ず、石炭の破片の混じた食事を攝つてそれでも憧れの南洋の民屋を自分の眼で見ることが出来て嬉しかった。この旅行の收穫は地理論叢第四輯に發表しておいた。往路臺灣に上陸し臺南市附近の本島人の民屋が奈良平野にある民屋と全く同じ感じのものであるのを發見したのもこの年の收穫である。一方は廣東・福建地方より傳つた大陸の影響であり、他方は朝鮮半島を經由して大和に傳つた大陸の影響であると思ふ。

昭和九年の夏休には遠方へ行くことが出来なかつたが、何處へも行かないのは残念で、休みの終になつてから急に思ひ立つてこれも一人で飛驒の白川郷へ乗り込んだ。考へて見ると私の旅行は何時も全くの一人である。美濃から入つて越中へ抜けた。途中交通機關の全く利用出来ない庄川上流の谷を十餘里も歩いた時には夜に入つて泊るべき宿も見當らず、地理の研究も仲々辛いと感じるのであつた。白川のことは地理教育第二十二卷第二號及び第三號に書いておいた。普通よく紹介されてゐる白川村御母衣の遠山家の五階造りの壯大な家屋があるが、それに似た私の言ふ白川造の民屋は更に北へ入つた庄川上流地方に澤山分布してゐることを發見した。

かくて昭和十年に入つては最近五ヶ年間に蒐集した寫真約四百葉を整理する時である。目下豫定通りに運ばないながらも少しづつ片付いてゐる。明年あたりは一冊の單行本として「東亞民屋誌」を公表したいと思つてゐる。

これらの旅行にはその前後に大抵石橋先生を御訪ねして豫め調査觀察すべき要項に就いて先生の御意見を承つてゐる。又その結果を報告もしてゐる。或時は御不快であるにも拘らず親しく種々の細かい注意まで與へて下さるのである。

私は在學中よりは卒業後に於て、ほんたうの先生の人格を發見し、先生に對する親しみと畏敬とを感じてゐる。今になつて在學中の不勉強を嘆くと共に後ればせながら何とか卒業後に於ける勉強に依つて昔の不勉強の埋め合せをしたいと思つてゐる。(昭和十年十月於大阪)

石橋博士のプロフィール

瀧 本 貞 一

□

私が博士を直接知つたのは京都大學に入つて地理學の講義を聽いてからである。最初の印象としては博士が一種の風格を備へて居られて、それまでに私が知つた地理學者とは全く違つたものを持つて居られるといふ感じであつた。それはその後博士の指導を受ける機會が度重なるに連れて益々明瞭になつて來たのであつて、これこそ科學者としての博士の眞面目の現れであつた。簡單に云へば物の考へ方地理學の方法論が常に系統的であるといふ點である。物識りの多い現代に於て我々が常に物足りなさを感じるのとはそれ等の人にシステムの無いことである。特に地理學に於ては一つにはそれは地理學の性質にもよるが従來この感が多かつた。我が國に於ける地理學をして一つの科學の領域にまで揚げた功績を我々は先づ第一に博士に歸せねばならぬ。博士のニックネームをラツツェルといふ。又宜なるかな。

博士の講義振りも有名なもの、一つである。これは博士の講義を聞いたもの、誰でもが感歎措かざるところである。それは第一に音吐朗々としてよく教室の隅にまで響きわたることである。それは一つは博士の性格の現れであつて、博士は誤魔化しを最も嫌はれる。物事をえ、加減にしておくことの出来ない性分である。近來兎角御健康が勝れられなかつたにも關らず、一度び教壇に立てば病氣のことは全く忘れられて講義に熱中されるあたり、聽いてゐる我々の方がむしろはら／＼したものである。博士の一回の講義はノートに取つていつも普通の人の一倍半から二倍の分量があつた。

博士の性格を知ることの出来る今一つの事は博士の時間に對する態度である。公の席上に於ける博士はどこまでも時間勵行をされ、ある場合には一分一秒をすら氣にかけられる。ところが我々が個人的に博士をお訪ねしたりお話したりする場合には頗る寛大な態度を示され、時刻や時間の如きは全く考慮されない如くにさへ見える。こゝに博士の公生活と私生活との間の截然が見られるのであり、このことは單に時間に關してのみでなくて總ての博士の生活が左様である。従つて博士の公生活の一面のみしか見ない人には博士は一寸近よりにくい、どちらかと云へば嚴肅に過ぐる人の様に見えるであらうが、一度び博士と私の交誼を得るや、人間石橋の眞面目は忽ちにして對者を捉へる。而もその内にひそむ稚氣に至つては益々博士の人格に信頼の念を起さしめる。學者の中には單に學問にのみ秀でて、眞の弟子を持たぬ人が多い中に博士が學問上の弟子は勿論、人格上に於ける眞の弟子を數多く持たる、のも全くこのため

に外ならぬ。

四〇

博士が教授生活の晩年に於て常に病氣と闘はれて居られる事實も亦我々の一大教訓でなくてはならぬ。その節制、忍耐、まことに一世の模範といつてよい。恐らく博士の闘病生活こそは萬人の龜鑑であらう。博士の日常生活を知るものは誰しもその偉大なる精神力に打たれない者はなからう。昭和の新井白石と云ひ度いが、事實は恐らく白石などより幾層倍か大きい教訓であらう。幸にして最近還曆を迎へられてよりは餘程快方に向はれ、元氣も恢復されて、いよ／＼その底強さを示して來られたことは芽出度い限りである。

博士が衛生に注意される一例として、支那料理を好まれることはよく知られたところであり、博士の御手傳をする
とよく夕飯に支那料理を御馳走になつたのは筆者のみではないらしい。

博士は今でこそ殆ど旅行をされないが、青壯年の頃には随分旅行されたらしい。興味のあることは博士の嚴父は徳川巡檢使と共に日本の各地を巡察され、従つて幼少の頃博士は父から日本各地の風物を聞き、それが後年地理學者としての博士を動かした潜在力となつたことである。又博士が歴史や地理の如き記憶力の強いことを必要とする學問に向はれたことに就いても思ひ合されることがある。といふのは博士は四歳にして淨瑠璃を語り、六歳にして百人一首を全部暗誦されたといふのである。

趣味の方面に於ても和歌の如きは中々堂に入ったものであり、若い頃には銀笛を吹かれたといふから一寸意外である。

□
家庭の人としての博士は我々の知る限りに於てこれ又實に心の行届いた方であり、特にお孫さんを相手に打興じて居られる時の博士は全くの好々爺である。

□
幼少の頃は随分贅澤な家庭に育たれた博士が、分家されて後本家の没落と共に經濟上にも幾らか不自由を感ぜられ、學生時代に本家から頒けて貰つた書畫骨董を金に換へられたことなどを承つて、筆者も嘗て妻子を抱へて大學に學んだ時、家にあつた古屏風の版畫などを賣つて生活の足にした時のことを思ひ合して、一層親しみを覺えた。

□
現在の博士は我が國の地理學界に於ける文字通りの大御所である。還曆のために第一線から退かれることは誠に残念であるが、併し又自由な身分になられて、側面から我が地理學界を導いて下さるには反つて好都合かも知れぬ。我等門下生は衷心より博士の御健康をお祈して、この上とも我が地理學界のためにお力添へあらんことを願するものである。(昭和十一年一月五日)

輓近地理學界の動向と石橋先生

米 倉 二 郎

嘗て、桑木嚴翼博士が明治大正に於ける我が哲學界の學風の變遷を論じて西洋哲學の啓蒙的、達意的、解譯的輸入の三つに區分された事があつた。この三階梯は我が地理學界にも大體に於て當てはめ得る様である。即ち幕末より明治初年に於ける外國地理書の翻譯出版は第一の啓蒙期に當り、明治の中年に及んで系統的な學校教育を経た學者の輩出するに至つて達意的時代に進んだ。當時我國唯一の綜合大學であつた東京帝大に於ては地理學は獨立の講座を有せず、文科大學の史學科と理科大學の地質學科とに於て相伴的地位の下に講義研究が行はれたに過ぎなかつた。

従つて、地理學界の今日を築いた先賢はこの兩方面より現はれた。故山崎直方博士小川琢治博士は即ち地質學科を我が石橋五郎先生は史學科を出身せられた地理學者の代表と言ふ事ができる。尙札幌農學校を出られた志賀重昂先生の先驅者としての存在は忘れてはならない。

山崎直方博士は、東京高等師範學校に於て地理學を講ぜらるゝ事となり留學され、留守中横山又次郎博士が代講せられたさうであるが、その後新歸朝の山崎博士の講義が全く横山博士と同内容であつて學生が意外の感を懷いたと云ふエピソードが傳へらるゝが(中村新太郎教授談)、之はその據られたものが共にワグネルの教本であつた事に起因したもののらしい。

石橋先生は神戸高等商業學校の開設と共に赴任されて商業地理を講ぜらるゝ事となつたが當時先生の講義は神戸高商の他校に對して持つ誇の一つであつた(竹田龍太郎氏談)と云はれてゐる。間も無く發表された「港の盛衰」の如き岡田武松博士が惟服されてゐる名論文なるを見ても先生の學風は既に達意の域を超えて解譯の境地に進まれてゐた様である。

明治四十年京都帝國大學に文科大学が開設さるゝや、史學科の創設に當られた故内田銀藏博士は地理學を獨立して研究する必要あるを認め、東大に於て師弟の關係にあられた石橋先生の來講を促され、又當時地質學者として一家をなし然も史學地理學に一隻眼を有せられた小川琢治博士を招いて、此處に最高學府に於ける我國最初の地理學教室が誕生したのである。

大學に於ける石橋先生の講義は主としてラッツェルによつて人文地理學を講述されたのであるが、勿論ラッツェルを完全に解譯咀嚼されて更に支那日本に於ける材料を盛られたもので、その堂々たる體系と興味深き引用とは全學生の等々傾聽した處であつた。

その後東京帝大に於ても地理學教室が生れる事となつたが之は地質學科と隣つて理學部に屬する事となり、最近設けられた東京文理大に於ても理學部に編入された。この兩教室の創設は山崎直方博士に負ふ處が大である爲我が京都帝大地理教室とは所屬を異にし又自ら學風も相異し、自然地理學を主流とし最近は人文地理學にも進出されつゝあるがやはり自然科學的研究に特長がある。

石橋先生は蒲柳の質で斯學の研鑽に努められ、遂にラッツェルの立場を揚棄して、自然地理學の解消を宣言され、

人文地理學則地理學の旗幟を掲げられた。先生のこの地理學觀出づるや、あたかも旭日の前に百星その光を失ふ如く全國の地理學界は翕然として之を仰いだ。最近に於て地理學性質論の論議さるゝ事多きを見たのは先生の發せられた警鐘の波紋と見做す事ができる。

今や東都の地理學界は山崎博士を失つて以來稍その歸趨に迷ふやうに觀取される。この時に當り石橋先生には目出度周甲の壽を迎へさせられ、健康の許す限り大學に於ける講案その他を纏めて上梓される御意向と承はる。この書一度出でんか我が地理學界の暗黒が照破され、地理學が本道に復歸すると共に、近時所謂受験地理の横行により、解譯より達意へ達意より啓蒙に逆轉せる感深き我が地理學界の水準をあるべき位置に引きもどすに至らん事は吾人の信じて疑はざる處である。

斯くて地理學も今や先進國の學ぶべきものは略學び終へてこれより日本獨自の地理學研究の起つてもよい局面に進んで來た様である。近時地理學史に就いての關心の高まりつゝあるは斯かる氣運にも關係する所があらう。將來の行方を定めんが爲の學史的研究は先づこれまで日本獨自のものが研究された過程を知る事が必要である。

かの奈良朝に於ける風土記、藩政時代の地誌等を受け繼ぎ明治政府は正院に歴史課と共に地誌課を置き地誌の選述にとりかゝつた。風土記以來日本の官選準官選の地誌がとつてもつて範としたものは支那に於ける正史の地理誌であつたから土地の歴史的説明に優れた特徴を有するものが多かつた。地誌課は地理寮となり後廢されてその事業は中途にして衰れたが、當時文明史に對する反動として起れる考證史學者の間に特に所に就いて關心を持つた人々があつた。その發表機關として雑誌「歴史地理」が生れた。この學派の代表は村岡良弼、喜田貞吉、吉田東伍博士等であつて、

日本地理誌料大日本地名辭書は實にその成果である。これ等の學者の仕事を一言にして評するならば、それは歴史の行はれた舞臺の考證であつた。云はゞ歴史學に奉仕せしめん爲の地理であつた。

この歴史學の爲の地理を、地理學の爲の歴史となし、地理學的歴史地理學建設へのコペルニカスの轉向の役割を爲したものは喜田博士の同窓として同じく「歴史地理」の同人であらせられた我が石橋先生の、武庫附近に於ける聚落の變遷、とそれに相次いで公にされた小川先生の越中の散村、大和の垣内式村落の研究であつた。これより日本の聚落地理が勃興し、地理學の他の分科に比して遙かに獨自の發達を示しつゝある。斯くの如き轉回は聚落地理のみならず他の各分科に於ても行はれ得べきものであらう。

最近に於ける地理學の進運は所謂人文地理學をも解體に導かんとしつゝある時最後に残さるべきものとしての地誌に對する日本牽るては東洋地誌學の有する意義は頗る重要なるものがある。これ迄歴史學に従屬せるかの觀ある東洋地誌學を聚落地理を中心として轉行を行ふ事により、綜合科學としての歴史學と對等の地位に迄高め得ないものであらうか。恩師の示し給へる御足跡を追ふて、この道によつて私は貧しき歩みを運ほうと思ふ。前途遠く徒に行路の艱難を託つ時大先達であらせらるゝ先生の御健在程心強い事はない。愈々御加餐あつて我が地理學界の行手を守らせられん事を祈りたてまつる次第である。

我が師を誇る

辻田右左男

石橋先生はその完き意味に於て私の恩師である。公私兩面に於て私は甚しく先生の御世話に與り、私はいつでも先生に對して感謝の念に溢れてゐるといつても決して過言ではない。種々の場合に於て私が先生より受けし御恩は數限りない。併し今は故意にかかる場合の思出を避け、唯最も印象的なりし二三の場合に於ける先生のポトトレイトを語つて見たい。その第一は先生が激しく怒られたことである。昭和六年の秋先生が珍らしく我が地理學教室の旅行に參加されて先づ和歌山に行き、それから翌日神戸へ向ふべく和歌之浦の一流旅館に投宿した時、その夜一行の殆ど全部が盜難に出會つた。小牧先生の大枚五拾圓也を始めとして金高にして百數拾圓、時計、萬年筆、洋服等殆ど持物全部を攫はれ、翌朝出發しようにも出發出きなかつた。別室に寝まれた石橋先生には幸ひ御被害はなかつたが、翌朝その旅館のとつた態度が甚だ怪しからんものであつたので、これが石橋先生の激昂を惹起したのである。即ち旅館の主人が病氣を口實に詫びに來ず、番頭が而かも大分後れて挨拶に來、主人に來いといへば何やかやと言ひ逃れし、結局一二時間の末主人が來たがその時先方の曖昧なる態度に對する先生の怒りは、實に物凄いものであつた。御自身被害がなかつたに拘らず、我等門下一同の不幸に對して、言を汚してその責任を回避してゐる先方に對し實に激しい言葉を以て責め、不條理を詰つて下さつた。駈けつけて來た二三の警察官も先生の恐ろしい見舞に辟易した位だつた。併し

その御激昂中にも理論の筋はいとも鮮かであつて、我等は各自の被害を忘れ、先生の痛快なる御論辯を寧ろ快感さへ交へて頼もしげに聞き惚れてゐた。門下弟子のためにかくの如く激しく戦ひ、相手の無責任を御責めになつたあの時のお姿は、己が年の爲めに豺狼と戦ふ力強き牧者の姿にも似て頼もしき限りであつた。先生の正義愛の強烈なることが迷り出でた一例であるが、この時の印象は一行の者誰もが胸に銘じて忘れ得ぬ所だつたと思ふ。

第二は矢張り同じ年の夏のことであつたが、閲覽室書庫並びに研究室にある地理學教室の書籍が大分亂雑になつてゐるのを心配され、七月の暑い盛りに御病弱の身を以て一週間近く毎日教室へ御越しになり、あの風通しの悪い、薄暗い閲覽室階下の書庫の内自ら一々書物とカードとを照合された。二三日目にはもうお越しにならないかと思つてゐたら相變らず九時過にはおいでになり、晝食時には御手傳した村松助手及び私を附近のアパート食堂で御馳走下され午後も引續いてお調べになつた。先生の責任觀念の強くあられるのを最も強く感じた一例である。

先生が心からの喜びを洩らされた場合も私は一二知つてゐる。川上健三君が年少にして臺南州視學に榮進した時など口を極めて同君の人格をお褒めになり、我事のやうに喜ばれた。私が臨時的ではあるが始めて中學校の教壇に立つ事になつた時それを御報告に行くと先生は大變喜んで下され、御病床にあられ乍ら教授の態度方法、始めての時間爲す講義の内容まで親切に御教示下された。曲つたことがお嫌ひであり、怒りにも喜びにも強く感情を表出されるのが先生の御性格のやうに私には感ぜられる。喜び、怒り、或は弟子達の間違つた行動等に對しては時に悲しみを感ぜられることがあつても、御自分のことについて悲觀的なお言葉を語られたのを私は曾て承つたことがない。これは矢張り先生の血管中に強い日本武士の血が脈々と流れてゐるからだと私は解釋申上ける。學者としてのみならず、男ら

しい、人間らしい、人の師として百パーセントの資格を有さるる石橋先生を、我が師として持ち得しことを私は何人の前にも誇りとする者である。(昭一〇、一一、二)

思　　ひ　　出

野　　澤　　浩

石橋先生と旅行を共にしたのは二回生の時にたゞ一回だった。しかしその時は大の男もすつかり青くなつた。と云ふのは一流の旅館で盗難にあつたことだった。先生だけは難をのがれたが、他の一行は總なめにやられた。一行の中には剣道二段の看板をもつ武君もゐるが、何のことはなかつた。彼氏も亦やられてゐた。中には質札のみたすかつたといふ強のものも居た。勿論自分もすつかりやられた。一回朝起きててんでんに下服がない、上衣がない、靴下がないと大そうどう。しかしまだやられた事に氣がつかなかつた。いよいよやられたと知つた時の皆の顔。石橋先生にこの時皆が一本やられた。どうも所持品の取扱ひが粗雑すぎるからだ。先生は自ら損害を蒙られなかつただけに他の者はぐうの根も出なかつた。番頭をよんで先生がきめつけられた時の言葉、今に残つてゐる。實にあの温厚な先生の口からかくのごとき峻烈な名言が出ることは……。歸りはみじめだった。金を少々もつてゐる人に煙草をかつてもらう、夕食をたべさせてもらう、服は宿の主人が中古商からとりよせて貸してくれた。本當におもしろかつた、といふのはあとから品物が返つて来たからのもので、その時は本當に弱つた。せつかくのエクスカージョンも第二日を臺

なしにして歸校してしまつた。中には口の達者なのもゐた、曰く、いつも夜散歩に出るのに、その前夜に限つて外出せず、調査物の整理に餘念がなかつたからいけなかつたんだ。がらに似ははず學問的な一夜をおくつた罪だと。賛成したのは私だけではなかつた。

次に思ひだすのは湯の溫度だ。たしか今岡十一郎氏の歡迎會が祇園の平野家でひらかれた席上だつた。何度の湯に入るかとの問題で四十度、五十度と段々せりあげていつて結局地理教室で一ばん暑い湯に入られるのが石橋先生、次が小牧先生といふことになつた。處が第三位決定が容易でなかつた。第一新ちゃん事今村君が猛烈な抗議を出した。そんな馬鹿なことがあるかつて……。處が又それに對して反駁が出た。それは虎と人間の相違であると。しかし第三位は結局誰もかち得なかつた。それは他の連中はいづれも獨身俱樂部の一員であつたから、平野家を出てからが即ち第三位決定の場面となつた。爲に私などは無理をして先生に便乗して吉田に歸るべきを南をさして四條の大橋を渡らされた。しかし遂に第三位は私達が卒業する迄きまらなかつた様だつた。

今一つ先生が大變身體を大切にされたことにちなんで一本やられたことを思ひ出す。卒業論文も提出し、やゝ暇になつた。しかし二週間ばかりほとんど徹夜で通した私は風邪をひいた。しかし、氣分だけはほがらかで、とても下宿にじつとしてをられなかつた。一方就職の件もあつたので無闇に下宿を留守にもしておかれなかつた。處が醫科の入學試験をうけに來た成城高校時代の舊友に出合つたので「一杯やらう」といふ譯で得意の正宗ホールと第五天國を案内して意氣頗る高いものがあり、風邪なんかすつとんだ氣持で下宿に歸つた爲か、石橋先生から二回もお使ひが來たと下宿の娘さん（大變美人でした、しかし御安心下さい）に云はれたので、すつかり酔もさめた。しかし時計は九時

をうつてゐた。さあ大變だ、酒くさくては先生に申譯けないし、色々思案しながら先生の御宅の前を二、三回往きつもどりつを繰返したが遂に入る勇氣なく、大原堂で電話をかりて、御たづねした處、さつそくやられた。「君どうかしてるね」……………と。まさか電話は酒の臭をつないでくれはしないだらうに……………と思つた。すると「君の聲は大變かれてゐる」と……………元來私の聲は上の方ではなかつた、新ちやんや鯨などの聲を甲とするとどうも私の方はブがわるい。藪蚊君もあまり明朗ではないが、しかしまあこの部類であり、してみると私のはひいきめにみて乙ノ下だ。これはもうしかたがないので別にきもとがめなかつたがさすがは先生だ。「君の聲はとても荒れてゐる。夜風にあたると大變だ。もつと用心しなければいけない。」と御仰言つた。かねがね都市地理研究に名をかつて河原町通り四條通りを彷徨したことが一時にばれてしまつた様な氣がして、すつかり先生のお顔をみないのに電話口で大汗をふきふきお答へしたといつた様なこともあつた。卒業後先生を御訪ねした時も「君身體を大切にしていしつかり勉強したまへ」といはれる毎に當時を思ひ出し感謝してゐる。

先生に對して御無沙汰のみしてゐる。全くの御恩知らずだ。今先生の還曆をお祝ひするに當り、いひしれぬ淋しさを感じる。かの莊嚴な風貌、武人的氣概、しかも母親の如き温い愛……………に接する機會が少くなつた事を思ふ時に本當に淋しく思ふのである。思ひ出の一端を述べると共に未ながく私達の學びの父として、又母として私達を鞭撻して下さらんことを願ひする次第である。

最後に先生の御健康をおいのりして筆をおく。

頌 壽

室 賀 信 夫

務古の山の巨磬のむた千代經べき

きみが齡をことほぎまつる

いみじかる地と人との理を

究めたまひしいさほしあはれ

はじめて先生にお目にかゝつた時、デヴィスとセムプルを興へられた。

八年も前のこと。その頌陳列館の中庭には桐の木があつた。

桐の花ほのと咲きゐる教室に

海彼の書を示したまひき

夙川のお宅へお見舞に伺つて

庭若葉明く映え入る室ぬちに

病ますと見えぬ師のみおもかも

みでし吾ら祈りまつらく師の君の

石橋先生と私

日 下 卓 造

私が石橋先生の御名前を聞いたのは、随分と昔の事である。私の兄弟は四人あつた。二人は京大で、後二人は神戸商大で夫れ夫れお世話になつてゐる。京大と神戸商大、それだけで、石橋先生に私の兄弟共が御縁深く願へたと云ふ事は申す迄も無い事だ。私には兄が二人、弟が一人あつた。長兄は昭和三年に死んでしまつたが、神戸商大の前身神戸高商の大正七年頃の出身だつた。彼が卒業をする時は石橋先生の經濟地理學の論文を書いてゐる。その頃私達の親父が生絲業を經營してゐたので、彼の論文は蠶絲業に關するものだつた。彼が残したもののの中にその論文の下書がある。毛筆で書いてあるのを見て、此處にも亦時代相の變化が伺へる次第である。

當時私は未だ小學校の生徒であつたが、彼が神戸から歸省する度毎に、石橋先生の事を話してゐた事を記憶してゐる。さうしてその頃神戸にあつた先生の御屋敷の庭で、奥様やお嬢様や坊ちやん達と一緒に、經濟地理學のセミナーの連中が、先生を圍んで卒業の記念寫眞を撮つたのが、今でも彼の形見の寫眞帳の中にある。私はこの寫眞を見る毎に感慨無量になつて來るのである。

當時彼が先生の事を話してゐた事で私の記憶に残つてゐるのは、先生の御背が大變に高い事、さうして非常に御親

切にして下さつた事の二つ位であらう。特に「お酒を餘り飲むと短命だぞ」と云ふ意味の事を云はれてゐた様に記憶する。彼は卒業後あちらこちらで、随分とお酒を飲んだ。さうして未だ四十歳にもならないで、三十六の年に死んでしまつた。丸で先生のお言葉を裏書するかの如くに。

次兄は京大でお世話になつたが、彼は醫學部の松尾先生の教室出身だつたので、直接には石橋先生とは關係は無かつた。

その次が私である。だが私の事を書く前に弟の事を云つて置かう。弟は他家に養子にやつてゐる。理乙なんかをやつたので、次兄と同じ様に進むのかと思つてゐたら、養子先が商家であるのと、彼自身の考へ方も變つて來たと見えて、長兄の後を繼いで神戸商大に入つてしまつた。石橋先生の事を知り乍らも、慕ひ乍らも、三ヶ年間一度も御聲咳に接せずに、經濟地理學も田中助教授から教はつた事を残念がつてゐた。

兄弟の中一番に御世話になつてゐるのは何と云つても私である。在學中も卒業後も。現在私の在職してゐる鹿兒島商業學校と云ふのは、校長は何でも石橋先生の遠縁に當るのださうだし、教頭は神戸に於ける石橋先生の教へ子である。教へ子なんて云ふとほんの嘴の黄色い様な事を聯想するが、明治四十五年卒業と云ふのださうだから、唯今京大に在學してゐられる學生諸君の中には未だこの世の空氣も吸うてゐられない方も随分と多數ある事だらうと思ふ。教頭は先生にはリツプスの倫理學なんかで随分と苦しめられた事を話した。先生が倫理學の教授として、今の野上先生の様な一役をも持つてゐられた事を披露して置く。さう云へば先生にはさうした所が多分にある様な氣もする。

在學中の私は、先生にはお世話になつたとか御指導を贈られたと云ふよりも、寧ろ御困せ申したと云ふ方が遙かに

適切であらう。だのに先生はお嫌ひな顔もなされずに親切にして下さつた。

現在の私には先生への報恩あるのみである。最近の先生の御容態御宜しいと聞く。誠に欣びに堪へない。何卒目前に迫つた先生の還暦の壽宴には懐しい御姿に接しられる様に、遙かに南の端から祈り乍ら擱筆する次第である。

——一九三五、一〇、三〇——

消息にかへて——一つの心

谷 淵 梅 龜

希望があるやうなやうな氣持ちで長い學校生活に別れを告げて、故郷で暮すやうになつて早くも半歳を経た。

田舎は小さい。二百戸位の小さな「マチ」を核心として生活してゐる一方に近い村の人々には、「純朴」が多分に藏されてはゐるが、羨望、嫉妬、僻み、而して義理も缺けば人情も薄いと云ふやうな、そんな氣持ちが經濟的不況の襲來と共に、漸次蔓つてきたやうに見える。

都會は機構が複雑であり、包含せる人間には種々の類がある。而して「向ふ三軒兩隣り」式の個人主義的生活である。他人の爲すことに干渉しない。己と他との利害に直接關係が殆んどないからである。だから其所に於ける生活は非常に自己本位であり得るので、生活の煩しさが少い。

田舎に於いてはさうはいかぬ。單調な生活は自己を見る時間に餘剰を生せしめ、或は自己を見ることすら殆んど無

しに、他人の批評に多くの時間を割くを得しめる、而も亦、それが必然的にさうであるやうに見える。一手足の上げ下しにも全部落、全村が注目する。忽ち噂は廣まるのである。和親的な、さう云ふ心持ちは人々の口舌を饒長にするもので、都會に缺けたるこの心持ちは、田舎の噂を特徴付けるものである。

だから田舎は世界が小さい。地理的に見ても我等の村は、一河川の源流に位置し四面山を以つて圍まれ、面積だけはひとなみ以上に大きい寒村である。村の下流では自動車の警笛が曉の夢を破り、上流では馬の鈴の音が黎明を告げてる。此所から御城下高知に行くことは、高知の者が東京に行くよりもずっと珍らしいことであり、たまに高知の文明開化の光りを浴びるのはまつこと楽しいことである。

村に漂ふ氣は、御城下の夫れとは勿論異なり、南方平野の村々の夫れとも亦異なる。高知より歸る時、香我美橋（談議所と神母木を結ぶもの）を境にして、平野から山峽へ移る氣分が特に強く感ぜられる。それ以北は昔から韭生郷と稱されてゐる地方である。昔の韭生は今も韭生である。山村には何處迄も山村の風が薫る。そこに善いところも悪いところもある。

實に、環境因襲の力は恐る可き程強大なもので、それに打勝つのは容易なことではない。人間の性質も又此の環境といふ奴に非常に拘束されつゝ、育まれる。大いなる轉換期に遭はざれば改變することはとてもむづかしい。だから、「境遇堅人」といふものが應々にして作り出されるのである。偽瞞の生活、吾を瞞り他を瞞れる生活、その心苦しさを知る人ぞ知るものであらう。さういふ人間は自己の性格を自覺するやうになるとかゝるものから脱しようと思ひるのであるが、弱い性格は化脱し得る勇氣を持つてゐない。自己の生活は他人の支配するが儘にまかし、命ぜらるる儘に動

いてゐる。

昭和八年の終りから九年の初めにかけて、石橋先生は教室に出られなくなると、自宅で講義を續行せられた。講義が終ると私達は何時もお茶菓子をお馳走になりつゝ、先生のお話しを承つた。その折、土佐人に似合はず覇氣がない、もつと進取の氣象を養はぬといかんと私は注意されたことがある。いかにもお言葉通りであると恐縮した次第である。それより二、三年近くになるが依然私の弱點はなほつてゐない。だがある機會が近付いてゐることは確かである。

遙かに先生を御想申上げるにつけて右の御教訓を思起すのである。而して未だに御教訓に副ひ奉つてゐないことをおわび申上げます。

終りに臨み石橋先生の御還曆を祝し奉ると共に、御寶壽彌榮ならむことをお祈り申上げます。

石橋博士還曆記念事業經過

- 昭和十年五月十一日 記念事業に就き近畿地方在住地理教室卒業生の相談會を開く。
- 同 年五月二十九日 記念事業に關し史學科卒業生協議會を開く。
- 同 年六月十一日 石橋博士還曆記念會發起人依頼狀發送。
- 同 年六月二十七日 石橋博士還曆記念會趣意書の發送を了る。
- 同 年十月十五日 事業費醸金の依頼狀發送。
- 同 年十二月二十一日 豫ねて、記念會より依頼中なりし鹿子木孟郎畫伯の石橋先生肖像畫完成。
- 昭和十一年一月五日 肖像畫並に記念品を石橋博士に贈呈す。
- 同 年二月十一日 石橋博士畫像掲揚式を地理學實習室にて行ふ。

肖像畫並に記念品贈呈式次第

昭和十一年一月五日、新年宴會の佳日に當つて、我等の恩師石橋五郎先生には目出度くも周甲の壽辰を迎へさせられた。かねて京都帝國大學文學部史學科及神戸高等商業學校、神戸商業大學の受業生有志の發起になれる石橋博士還曆記念會の事業として計畫せし、御肖像油繪(鹿子木畫伯揮毫)並に記念品は見事に完成し、この佳辰を以て受業生代表により先生に贈呈された。

この日午前八時京都より西田直二郎、田中秀作、小牧實繁、米倉二郎の四氏は御肖像額を奉じて夙川に向ひ、高松の寺田貞次氏和歌山の小野鐵二氏及神戸商大同窓會の丸谷喜一、竹田龍太郎、北濱留松、福田敬太郎、水谷公穂の諸氏と驛前喫茶店に落ち合ひ、式の手筈を決定し、十一時一同打連れて石橋先生御宅に參上する。

一同は二階客間の設けの席に招ぜられた。御肖像を床間に飾つて待つ事しばし、石橋先生には御氣嫌よく、紋付和服にて令夫人を同伴して臨席さる。福田氏の司會の下に丸谷氏は贈呈品目錄を三寶に奉じ、寺田氏と共に進んで先生の御席前に至り、寺田氏一同を代表して今日の御祝辭を言上し、丸谷氏によつて記念品が贈呈せられた。之に對して石橋先生は御鄭重な謝辭を述べられ、更に床にかけられた先父君の御肖像を示され先生御自ら身に着けられた羽織裏に書かれた先考保國翁自筆の八十歳の祝の和歌を披露し父恩の難有さを語つて一同を感激せしめられ、更に御子息夫妻より一同に對して重ねて御挨拶があつた。かくて式を終り一同御屠蘇を戴く、

先生にはこの席にて御家族と共に御肖像を中心として記念寫眞を撮られ、又一同と共に御庭でカメラに入られた。それより一同自動車にてパインクレスト、アパートに於ける先生主催の賀宴に招かれた。宴席は高臺の見晴し良き場所を占め、眼下に六甲より陵夷する丘阜の松林を臨む。しかもこの日、空麗かに澄み互り、眞に天地もこの日出度さを祝福するものゝ如くである。

やがてデザートコースに入るや、石橋先生には一同に對し重ねて、その勞を謝せられ、先生の御幼時より今日迄の懷舊談を試みられた。先生は千葉縣佐倉鎮臺の政商石橋保國氏の家に明治九年一月五日その長男として呱呱の聲をあげられ、幼時は乳母の手に育たれた由で、その乳母なりし婦人が淨瑠璃狂なりし爲、先生は見なれ聞きなれで齡四歳

にして、その一章を誦んじられたと云ふ。又御六歳の時母堂より百人一首を教はつて、之を盡く暗誦されたとの事である。一同、栴檀は二葉より香しきを今更の如く感じた。少年時代には、兵隊ごっこをして負けじ魂を養成され、日清、日露、日獨役等我國史上の重大轉回期を盡く經驗せし事を述べ、殊に日露役バルチック艦隊の回航に際して國民が一致緊張せし事を舉げて、この體驗を持たざる青年は憐むべきであると極言された。又その間に於ける世情の變遷に言及され、按摩上下三百文即ち三錢で按摩が出来た時代から、先生が高校大學を一年間百圓の學資で卒業せんとする計畫を建てられた事等を物語られた。尙先生には、その御生活を通して見たる世情の變遷と云ふ如きものを纏めて、還曆記念會賛助者一同に頒たるゝ御志であるとも漏らされた。

竹田龍太郎氏は一同を代表して、本來は私共にて賀宴を設け、先生を御招待すべきの處、却つて御招きにあづかり御歡待に接する事に對し謝辭を述べ、神戸高商在學時代の思出を語り、先生の商業地理が當時高商の全國に誇るべきものゝ一つであつた事、又その頃から先生はどちらかと云へば御弱い方で御洋行に赴かれる話を承つた時には非常な冒險であると心配せざるを得なかつた、處が先生は無事歸朝されたのを見て、先生は實に強固なる意志の力によつて肉體を率ゐられて行く方であると感じた。先生が今日の慶びを迎へられた事は決して偶然ではない。私は先生が更に古稀、米壽をも祝はせられる事は信じて疑はざる處である。その節には更に一同が斯くの如く相會したいものであると述べ先生の御加餐を祈られた。次いで西田直二郎氏の發起にて先生の華甲の壽を祝し併せて御一門の繁榮を祈つて一同乾盃した。

それより自己紹介に移り、米倉氏は日露戰爭を知らず先生の憐むべき青年の一人なる事を歎じ、小牧氏は漸く物心

付いた頃に遭遇したと語り、田中氏は元來蒲柳の質ながら大病をせず今日に至つてゐるので、養生の點なりと先生にあやかり度しと希望され、寺田氏は第一回の地理專攻學生として先生の薰陶を受けし以來の事を語られ、丸谷氏は最近園正造氏令妹と結婚され家庭を齊へた事を報告され、園氏が商大に來講さるゝに至つたのは石橋先生の御紹介による事より、この奇縁によつて、新家庭の生活が先生の御家庭にあやからん事を希望された。西田氏は學生時代ある雪降りに先生の御講義を御待ちしてゐた處、休講の報があつたので教室に居合せた惡たれ連が集つて、「石橋は今日は渡れず明日來むと、小川の縁に佇みにけり」と一首の狂歌をボードに合作せし事を披露し、竹田氏は禿頭を撫して、他人は私に君は高商の一回の卒業であらうと云ふが實は四回である。中には一回以前だらう等と云ふものもある程老人となつたが石橋先生は昔から少しも御變りがないと語り、北濱氏は先生の商業地理は大に苦手であつて今は忘れてしまつたが倫理の御講義に至つては今尙腦裡に明瞭に記憶してゐると語られ、福田氏は高商の入學試験の時、背の高い髭を生した恐い試験監督が見えて、自分の寫真と顔を見比べられた思出を語り、それが石橋先生との初對面であつた、石橋先生を保證人に御願ひしたので悪いことをせずに来たと云ふ。水谷氏は先生が興風會長であらせられた時幹事の一人として御世話になつて以來今日迄御指導を仰いでゐる由を話され、最後に小野氏は一同と共に先生が愈々御齡を重ねられん事を祈つた。主客歡を盡して時のたつを忘るゝ事數時、一同辭して歸途についたのは既に町に電燈のともる頃であつた。(十一、一、五、米倉記す)

臺灣の高地生活

内田 勣

高地生活の状況を研究する場合に限らず、地理的研究に地圖の必要な事は論を俟たぬのであるが、臺灣に於ては陸地測量部の地圖は大體平野の部分が發行されてゐる丈で、山地の部分は殆ど出て居らず、僅かに新高山のやうな有名な所のみ、而もその西斜面のみ描かれて居るにすぎず、標題の如き研究の材料とは爲し難く、著しい不便を感じる。

陸地測量部の未發賣區域を補ふものとして、總督府民政部警察本署で明治四十年頃測量したものが「蕃地地圖」と云ふ俗名のもとに、臺灣日日新報社發行で賣られてゐる。縮尺は五萬分一で、一圖面の範圍の切り方は測量部のものと同じく、すべて範を測量部地圖にとつてゐるが、測量は著しく粗雑で、同範圍にして測量部の地圖もある部分について比較してみると、地形の相違が甚しく、製版はきたなく、且つ等高線は百尺(米制に非ず)毎である爲何かにつけて不便で、到底精密な圖上觀察の材料とはなし難い。且つ部分的に未測地域が残つてゐる。以上のやうな理由で、臺灣の高地聚落の研究は全く足を以てなされなければならない状況にある。

臺灣の高地生活者の一方の代表と云ふべきは蕃人であるが、これは全島約十五萬人中、半數は平地に、半數は山地に住んでゐる割合である。然しこの所謂高山蕃は昭和五年に勃發した霧社事變(霧社は海拔一四二〇米)以後、なるべく高山から山麓方面に移住させる策をとり、霧社から花蓮港附近に通ずる能高越道路の途中にあつた海拔約一〇〇〇米の坂邊さかべの蕃社は殆ど平地と云つても差支へない初音はつね、銅門の附近に降されて、整然と蕃屋の並んだ移住聚落の成立を見てゐる有様である。他の例として霧社事變の時、所謂敵蕃となつた最も兇暴な者の中、生き残つた者は全部山を下して脱走の不可能な川の合流點所謂川中島にとまともに移住させた。然し蕃人としては高山にゐる方が氣候がよく殊にマラリアのおそれがないので、容易に下山をがえんじなかつたと云ふ。

又これと共に、從來タイヤル、ツオウ等の蕃人で山の高所に孤立した蕃屋を建て、點々として生活してゐる者を、山地ではあるが一ヶ所に集め、山腹に階段式層狀聚落をつくつてゐるボアルン(霧社附近)の富士蕃社のやうなもの(海拔一一五〇米)もある。

このやうな次第であるから、蕃社及び蕃屋は舊來の位置を捨て、續々と山を下る傾向にあるが故に、蕃人の高地聚落研究は是非共早速着手する必要がある、その點に於ては不正確乍ら測量の古い臺灣日日新報社發行の蕃地地圖は研究上の好指針となるものではあるが、遺憾乍ら蕃社の印とその名があるだけで、個々の蕃屋を示す程に精密にはなつてゐない。

右に書いた事柄は大體蕃社の最近の移動に就てであるが、從來の蕃人居住の高距限度は自分の登山の經驗から海拔二〇〇〇米位と思はれ、これ以上では彼等の常食たる粟も十分に栽培されぬものゝやうである。

次に高地生活の他の代表と云ふべきは、理蕃の爲に設けられた山中の駐在所で、臺灣獨特の存在である。現在中央山脈横斷の道路は全部で七本あり、蕃界の駐在所は合計五二三箇所にとんでゐる。

これらの横斷道路中、筆者の通過の経験あるものは僅かに八通關越（臺南州阿里山及臺中州水裡坑から入つて新高山附近の八通關で合し、臺東廳玉里に出るもの）と能高越（前出）とがあるに過ぎないが、これらは全島中でも著しい高所を通過してゐるものゝことゝて、極めて高所に駐在所が存してゐる。

その第一として八通關越の途中に南駐在所がある。これは大水窟山（三六四五米）の南直下にあたり、海拔三三七〇米、日本最高の聚落と云ふべきである。勿論富士山頂に觀測所の設があるが、これは食料を一切下界に仰ぎ、又所員は交替して永住しない。これに比べてこの駐在所は巡查一名、警丁二名が永住し、駐在所の周圍には畑をつくつて野菜を栽培し、事務室、居間、臺所、風呂等一切の普通平地の人家に同じく、唯周圍に土塀を築き、鐵條網を設け、蕃人防禦に便してゐる點が平地の家と異なる點である。

抑々臺灣の蕃地駐在所では治安の維持、授産、教育、醫療、交易、道路橋梁の修理新設、電話線の維持架設、旅行者の監視宿泊、更に萬一の場合の城廓としての任務を有することゝて、事務甚だ多忙を極めるのであるが、我々は昨昭和九年七月、南駐在所に三泊し、巡查警丁諸氏の懇切な待遇を受け、内地山岳地方の山小屋とは別趣な快い山の生活をした事を思ひ出す。又 M. Walton 氏はその著 *Scrambles in Japan and Formosa* の中に於て南駐在所の野天風呂の快味を筆を盡して書いてゐる。

從來此の駐在所も他と同じく、相當年輩の巡查が勤務し、従つてその妻子までも三三七〇米の高所に居住し、家族

等は暇を見出しては近隣の駐在所を訪問するのを唯一の樂みとし、都會地に出ることは減多になかつたものであるが、出産の際の困難、子供の教育等の爲、南駐在所では昨年四月以來家族ある巡査を山麓地方に轉任させ、代つて獨身者を置く事になつたと云ふ事である。

然し現在でも海拔二五〇〇米の觀高駐在所（新高主山の東方）には家族持の巡査が勤務し、その附近の對關駐在所（二二〇〇米）ではこれを訪れたのが丁度七月十日であつた爲、明日から小學校が休みになる事とて巡査は適當な用務をつくつて下山し、下界で小學校の寄宿舎に入れてゐる一年生をつれて來るつもりだと語られ、理蕃關係巡査の家庭の同情すべきを痛感した次第であつた。

上記の外新高附近で三〇〇〇米以上の高さを有する駐在所としては新高下、新高（各三三〇〇米）、及大水窟（三二二〇〇米）の各駐在所があり、もし二五〇〇米以上となれば鹿林山、八通關、バナイコ、秀姑巒、ツツジ、觀高がある。これらは何れも間隔凡そ一時間半乃至四時間行程である。

次に能高越道路の方で二〇〇〇米を越す駐在所は東能高（二二五〇米）、能高（二九二〇米）、松原（二四九〇米）、尾上（二二五〇米）、トンバラ（二二〇〇米）の五ヶ所が現存し、外に富士見には霧社事變以後新設されたが、蕃狀靜穩に歸した爲昨昭和九年七月廢止されてゐる。これらのものは東能高が分水界以東（花蓮港廳側）にある外、全部分水界の西方に位し、西側の分は霧社事變の際燒打にあつた所で、殊に能高駐在所の如きは檜御殿と呼ばれた立派な客室を持つてゐたのであるが、今はみすほらしいバラック建の駐在所となつてゐる。又東能高では事務室から地下道に入り、敷地の一隅にある銃眼付の望樓に通するやうになつてゐる程警戒嚴重を極めてゐる外、山の突角等の位置を占めて平

地の少い關係などから、畑を耕作してゐる所はあまり見當らなかつた。然しトンバラ駐在所附近では急斜地に蕃人が段畑を作り、やゝ下方の蕃屋から毎日登つて粟、黍、薯等を耕作してゐるが、これは能高越道路附近で蕃人の畑の最高なるものである。

尙これらの五駐在所中能高以外の四ヶ所は全部家族持がある。

このやうな蕃界の横斷道路は通行する人が極めて稀で、阿里山——新高——八通關——水裡坑のやうなコースのみは夏中登山者で賑ふが、八通關から玉里に行く道路の如き、筆者が七月上旬南駐在所に三泊してゐた間、一人の通行者もなかつた。又能高越は昭和九年八月上旬に行つたのであるが、同年の正月からその時迄の通行者は蕃人以外僅かに三十八人と云ふ少数である。尙これらの駐在所間の物資、郵便の運搬は警丁自ら、又は臨時に使役する蕃人によつて行はれる。

以上のやうな蕃屋及び理蕃の爲の駐在所以外の高地聚落はあまりないが、唯阿里山だけは、著しい特色を持つてゐる。周知の如く木材の爲の聚落で、驛は海拔二二七〇米に位し、中央山脈の所々に見られる山頂附近の平坦な部分に出來た町ではあるが、勿論かなり層狀をなして家屋が並んでゐる。氣候上内地によく似、冬は九州、夏は樺太の氣温に等しい爲、櫻も咲き、その住民の顔色は所謂臺灣色なる暗黄色とならずに櫻色を呈し（これは氣壓の關係にもよる旨阿里山觀測所の伊東氏が語られた）、現在椎茸の人工栽培が行はれ、又臺灣の平地にはないチューリップ畑がみられ、如何にも内地氣分の濃い所で、小學校には一五〇名の生徒を收容してゐる。この阿里山への登山鐵道の完成に伴つて、その沿線にも聚落の發生、發達を促し、奮起湖は海拔一三三六〇米で人口約一五〇〇を有する密集村落をつくり、

又二〇〇〇米には二萬平の聚落がある。

以上筆者の浅い經驗の範圍で臺灣の高地生活の一部を記したのであるが、他日より詳細な調査をなしたく思つてゐる。

尙前出の海拔高度は地圖、駐在所に於ける表示、筆者の携帶する登山用バロメーター等によつて求めたものである。

別府温泉發達の原因

兼 子 俊 一

近年本邦に於ける保養遊覽都市の發達は著しい。これは一般に都市生活の複雑化と交通機關の發達に伴ふ旅行趣味の普及によるものであらう。温泉により純然たる保養遊覽都市として發達して、現今市制を上げるは別府市のみである。別府市は昭和十年九月三日、同じく温泉を以てその生命としてゐる同温泉地帯の龜川町・朝日村・石垣村を合併し人口六一二四九人(舊別府市四六九七四人―昭和九年末)となつた。別府灣の一漁村から、年々二百萬の浴客を迎へる全國的、世界的(在支外人の外、數年來毎年歐米の富豪を載せた世界觀光船が來訪する)保養遊覽都市に躍進したのである。その異常なる發展の原因について次の様に考へてみた。

一、温泉の種類が多いこと

單純溫泉(田湯・梅園・靈潮・觀海寺・鶴見園)

單純炭酸泉(紙屋・堀田)

炭酸鐵泉(竹瓦・藥師・不老・海岸砂湯・鐵輪・柴石)

弱食鹽泉(濱脇・龜川・二條)

酸性明礬綠礬泉(明礬)

硫化水素含有綠礬泉(上の田白湯)(溫泉大鑑)

かくの如く泉質が種々異なり、その效能を異にすることは、各種病氣の療養客を吸収し得る事になる。舊別府市の旅館は三〇四を數へ、内一四七(昭和七年―別府市誌)は湯治客相手の木賃宿である。木賃宿と言ふも所謂木賃宿とは違ひ、その設備は普通の旅館とは何等異なる所なく、湯治客の便宜をはかれるものである。現在溫泉治療諸施設の一として九州帝國大學溫泉治療研究所がある。

二、溫泉の湧出量極めて豊富なること

一月	一三八、五三五
二月	一三一、五三三
三月	一六九、三九六
四月	二〇二、八四八
五月	二一九、二七二
六月	二二七、一九六
七月	一一八、一三二
八月	一八一、八三七
九月	一〇八、三六六
十月	一五二、七九九
十一月	一四六、八二一
十二月	八六、二二四
合計	一、八八二、九五九

(昭和八年別府溫泉浴客數)(舊別府市)

源泉の數より見れば、別府市内のみで一―二九を數へ、全國五八八九(溫泉大鑑)の中一割九分を占めてゐる。舊別府市の一晝夜の湧出量は一八萬ヘクトリットル(九萬九千石―溫泉大鑑)である。遊覽客の方は湯治客と異なり、どこ
の溫泉は泉質は何で何病に效くかはどうでもよいのであつて、唯滾々として盡きざる天然のお湯を喜ぶ。

温度も高温で、大部分五〇度乃至六〇度であり、燃料に依り温度の不足を補ふ必要もなく、又引湯も多い。特に高温なる温泉の湧出は地獄と稱せられ、地獄廻りの遊覧は一名物である。

三、風景の雄大なること

狭い溪谷沿ひにせまぐるしく發達した温泉街と異なり、鶴見火山の東麓、火山噴出物扇狀地に發達した東西五軒南北八軒の大温泉地帯である。鶴見岳高崎山等の連山を背に開瀾なる碧海別府灣を前にせる絶佳なる眺望と新鮮なる空氣とは浴客の喜ぶ所であり、保養客の療養上或は遊覧客の慰安上價値ある事は申す迄もない。新しく編入された地域には由布・鶴見の二火山とその山麓の高原・志高湖・内山溪谷・朝日ゴルフ場等開發さるべき勝地が多い。

四、街の雰圍氣が大衆的なること

前記の如く旅館も大衆的であるが、その他すべてが大衆的で各階級の客を迎へてゐる。夜の歡樂境も大都市に比すると大分落ちるやうであるが、料理店カフェ、ダンスホール(京阪神以西では關西唯一)等多く、一部のお客をひきつける夜の女(舊別府市のみで約八百人)の隠れたる功勞をも認めねばならない。帝國艦隊も年に數回休養の爲入港する此等多人數の兵士の休養を許す街は他に比類を見ないであらう。上海を中心とする大陸在住外人の來り遊ぶ者が多いが彼等の一流所は雲仙唐津に遊び當温泉へ來る者は二流以下と稱せられる。之は當温泉のもつ大衆性の一面を示すものであらう。

五、附近に名勝地を多く有すること

大阿蘇火山・耶馬溪・宇佐神宮をはじめとし、水郷日田盆地・由布院温泉・風連鐘乳洞・深田石佛等が近くにあること

も遊覽客をひきつけ或はその滞在期間を長からしむるものであらう。

六、位置の優秀なること

その位置稍々西に偏し京濱・阪神等の大都市に遠きことは不利な點であるが、阪神地方からは海上連絡も便利であり(十八時間を要し、毎日二回)、近くに將來も有望な北九州工業地帯を控へてゐる(汽車四時間乃至五時間)ことは非常に有利な點である。

國際觀光ルートの上より見るも瀬戸内海國立公園と阿蘇・雲仙・霧島の各國立公園を結ぶ要地にあることは將來益々有望な點であらう。

七、氣候の良好なこと

之は何も此の地に限つた事ではないが、全國の保養地遊覽地には季節によつて盛衰ある所が多い。しかしながらこの地は氣候良好避暑避寒共に適し四季を通じて浴客を迎へ得る。

以上別府市發達の原因と思はれるものをいろいろ羅列したが、要するに世界に稀に豊富な温泉と種々附加的好條件とによつて多數の保養遊覽客を吸収するやうになつたのである。従つて旅館・土産物店等の營業者の來住となり、保養者の住宅別荘街が作られ、此等を華客とする種々の商店等も次第に増加して行く。かくて別府灣の一漁村は遂に全國的世界的保養遊覽都市に躍進したのである。現在六萬の別府市民は直接間接に此等年二百萬のお客の懷によつて生活してゐるのである。既述本年九月三日の近郊温泉合併を機會に尙一段の躍進を遂げるであらう。地獄廻りの途中、「皆様此のあたりに別荘をお建てになつては如何でございますか」(車窓に見える數多くの湯の噴出を指さし乍ら)バスガ

ールの解説はひとしく遊覽客を苦笑させる所であるが、之等空閑地の中の湯の噴出は前記の諸原因と共に將來の發展を豫測させるものである。

談話會報告要旨

昭和十年九月二十六日第四回談話會

中之島の地理學的研究

和田 俊 二

大阪市の商業地域は都市計畫に依つて指定された地域であるが、此地域内の特色に依つて更に買物地帯、倉庫地帯、金融地帯に分ける事が出来る。私は大阪市の商業地域を調べるに際し、先づ中之島及其附近は倉庫地帯に當ることを明かにした。

大阪市内にある倉庫は昭和六年に於て、總棟數八七四棟、延坪數一三二七、七八八坪である。此等は總てが運河岸に臨んで位置してゐる。處で此運河は開鑿年代に依り、秀吉大阪入城後、その滅亡までに完成したものと、其後而も現在に近い時代に開鑿されたものに大別し得るならば、前者は商業地域に多く、後者は工業地域に多く分布してゐる。

古き運河に臨んでゐる倉庫は坪數では全體の三三%に對し、新しき運河に臨むもの六七%である。(一)中之島附近の倉庫は前者に屬し、前者の中の六五%を占めてゐる。残りの三五%は市内に散在してゐる。従つて中之島附近は、商業地域内で最も廣い倉庫地帯を爲してゐる。(二)築港附近は新しき運河に臨むもの、最も廣き倉庫地帯を爲してゐる尤も海にも臨んでゐる。

(一)(二)を比較すると、その延坪數に於ては大差はないが、棟數に於ては(一)が二三九棟であるに對し(二)は九二棟である。此は(一)が一階建の舊藏家數の土藏或ひは此を改建したものであるに對し、(二)は近代式建築の倉庫であつて一棟が大きい事と垂直に伸びてゐる事に依る。

茲に於て中之島及其附近は大阪市内に於て最も密な且廣き倉庫地帯を爲してゐることが言へる。

京都衣笠扇狀地の先史地表

神尾 明 正

南洋土人の海圖

織田 武雄

地球に發表の筈。

西濃春日谷の聚落到就て

田中 秀作

去る九月二十三日二十四日垂井驛から岩手村を經、天神峠を越え揖斐川の支流粕川溪谷通稱春日谷の山村聚落を巡檢し、揖斐町に出た際に調査した、揖斐郡春日村笹又の出作夏村即ち十一戸の全部落が伊吹山の東斜面の約七百米の地點に位し、其の住民は春から秋にかけて附近山間の段丘や斜面を開拓して粟、黍、蕎麥、馬鈴薯、里芋、蕪蕪芋、野菜、茶等を栽培し、製茶、養蠶、藥草栽培、炭焼等を副業として假の住家に起居し冬來れば積雪や崩雪の脅威の爲引揚げて約十軒の下流の親村小宮神、川合の本宅にて越冬し、春の雪融けを待つて再び出作を始める移動聚落の生活状態を中心とし出作固定の古屋、

親村の小宮神、川合等の聚落形態と住民の出稼生活に就て報告さる。

十月二十四日第五回談話會

十津川雜感

長谷部 健史

新潟の景觀

須藤 賢

新潟とは新潟市の信濃川左岸に位する地域の稱である。一、海岸地帯(便宜上海岸線と砂丘の五米等高線間)の景觀。

明治四十四年の陸軍陸地測量部の地形圖と、昭和六年の同修正圖とを比較するに、この海岸線は大體百米の後退をして、測候所、日和山一帯は海蝕をうけ崩解し絶壁をなしてゐる。この海岸線の後退は大河津分水工事完成(大正十五年)のため信濃川の漂流砂が減少して砂丘成生の材料が殆んど失せた事が大なる原因であらう。次に考

へられるのは新潟港西突堤を設置(明治三十九年完成)のため冬季それに依つて卓越する漂流の海岸侵蝕であるがこれはむしろ新潟港の浚渫のため日和山方面より砂が浚渫せる深所へ移動するために生起する第二次的意義のものである事は新潟高校教授徳重氏、内務省土木課長鈴木氏が認めてゐて、兩氏は共に海飾の原因を港灣浚渫に依るものとされてゐる。然し關東大助教授は突堤の緩S字形の曲線のため漂砂の移動は見られないと申されてゐるところを見ると浚渫に依る海飾に一疑問が生ずる。されば大なる原因は前述の大河津分水の完成のためならん。もし浚渫が海飾の原因とすれば、浚渫は新潟港最近の發展(上越線京圖線開通のため日滿關係の裏日本の要所となりたるため)に必要なものであり、それが海蝕を生じ新潟文化に害をなすとすればこゝに文化的 Dilemma が惹起することとなる。

W. Volk の提稱せる景觀の律動とも云ふべき夏季海岸の文化景觀の主なるものは海水浴場それに附隨する濱茶屋などであらう。

二、丘陵地帯(五米の砂丘等高線内)の景觀。

新潟は元、一砂嘴なりしが信濃川の漂砂と、日本海の潮力及び季節風の自然力により暫時自然的砂丘が生成した。その飛砂の害に抗するため元和三年(三百十年前)堀直寄の防砂設備があり、以後、風間正太郎著「新潟砂防史」に見る如く、この砂丘の自然景觀は遂に文化景觀と化し、その防砂設備と互に因果關係をなし、丘陵地帯の文化設備が發達しそれに伴ふ住宅街が發達した。

三、市街の景觀は時間の都合略して家屋につき一言す。

冬期西北風のためその方向に破風のある妻入の家が多い。然し新商店街は平入となつて商賣に便となつてゐるガン木のある家屋は明治四十一年前の大火前の家屋で、その後家屋はガン木が火災の導火線となる理由で禁止されたため、これを有せず。

地名研究の諸問題

鈴木福一

地名の研究は近來ヨーロッパにおいて特に盛であり、

中にも英國地名學會の活動は最も著しい。我が國には吉田東伍博士の業蹟の後には格別な斯學への寄與が見られない。地名の研究は幾多の問題を含み廣汎な文化科學の知識の上に立つべきであるが故に、その研究の充分なる發達は將來に俟つべきものである。

先づ地名と民族との關係はイギリス、フランスの如き複雑な民族的構成を有する國においては、殆んど地名起原の解決の鍵として重大視されその地名の分類は民族別にされてゐる。即それは各民族は言語を異にし、必然的に地名も異つたものを生ずるとの前提に基くものである。しかしスコットランドの地名研究においてマツケンデーが云つてゐる様に、民族と言語とは常に同一關係にあるものでなく、民族は純粹であつてもその言語は次第に變化することも考慮されなければならず、更に地名の構成における各民族の特質等について、更に幾多の問題がある。我が國地名の研究においても、アイヌ語のみが唯一つの鍵の如き觀があつたが、なほ一層の博搜が必要であらう。

次に地名は言語學的方法によつてのみ研究可能であるとの主張を有するものが多い。これは多く言語學者側の主張であり、歴史、地理方面からの研究を蔑視する傾向がある。しかしセヂフィールドの如く言語學的方法と地名學的方法との本質的相違を説くものもあり、セシルワイルドの如く言語學的研究は、地名の解釋に曙光を投ずるものに過ぎないとするもある。言語學的方法は唯地名の起原的説明において有效であつても、地名學は單に起原の説明に終るべきではない。

地名と歴史との關係については、その重要性は種々説かれて居り、而してそれは前のものと反對に地名の研究により、歴史の研究に光を投ずることを得るとの主張が多い。地名はこの點において金石文に匹敵する貴重な史料であるとダウザーは云つてゐる。しかし甚だ簡單な構成をもつ地名からは、その内容的なもの引出されず、結局は分布的研究による歴史地理學の結果を得ることを中心とするものに思はれる。

地名と人名との關係は一般に地名の方が古いとされて

るが、これは交互的な性質を有するものであらう。キリスト教徒が聖者の名を多く地名とするのは著しい特徴である。生滅移動する人名より比較的安定的な地名の方が研究の便が多い。

地理については、地形と地名との関係が多く説かれてあるに過ぎない。しかし前述の如く地名學なるものを成立せしめんとするならば、地名の意義の解釋のみではなく、その一般文化との關聯を跡付けなければならぬから、地名現象とも云ふべきものゝ研究が必要とされ、その中に地理的分布が重視されるべきである。

十月二十五日第三回談話會大會

談話會大會に先立つて午餐會を午前十一時半より樂友會館に開いた。石橋先生も御出席になりデザートコースに於て大要左の如き御挨拶があつた。

「京都帝國大學文學部の地理學教室は本邦の地理學教室の中では其の歴史が最も古い教室である。將來のあ
る若い諸君はどうかその誇りを忘れずに協力一致して

研究を勵み教室の名を擧げて戴き度い」。(文責在安藤)

隱岐列島の水産製造業

安藤 鏗 一

地球に發表。

奥州街道と白川町

室 賀 信 夫

論叢に發表の筈。

北海道の甜菜糖業

織 田 武 雄

追つて發表の筈。

ラテン・アメリカに於ける石油

資源の地政學的意義(要旨)

別 技 篤 彦

アルフレッド・ヘットナーの所謂「世界政策、世界經濟、

世界交通は高き程度に於て地理學的現象である』との見地から筆者はこゝに石油政策をとりあけてみた。即ち地政學の立場に於てある。

大戰後の世界に於て最も著しい現象は諸國家間の空間政策ならびに空間經濟の發展とその對立であるが、石油資源を繞る争ひはその最前線に立つものと考へられる、殊にメキシコ以南のラテン・アメリカ諸國ではそれが最尖鋭化した地域の一つとしてあらはれてゐるのである。それは次の諸原因によつてある。

(一)ラテン・アメリカ主要七ヶ國の石油產出高は一九三四年度に於て世界全產の一五%、米國を除ける残りの世界產額の四〇%を占め、又埋藏量の點からは全世界の六五%を占めると稱せらるゝほど豊富である。

(二)これが禍してラテン・アメリカに對する先進資本主義國家殊に英、米の活動を惹起したのである。殊にその際ラテン・アメリカ諸國の特徴たる政治的無力性は最も乗ずべき間隙を提供したもので、英米は極端な國家的エゴイズムの發揮により、此等諸國の貴重な石油資源を

片端から暴殄せんと力めた。

(三)英、米の争覇戦は即ち國家を背景とする巨大な石油資本の争覇である。英のロイヤル・ダッチ・シェルと米のスタンダード兩社の戦はラテン・アメリカで特に激甚を極め、之がため諸國民の蒙つた迷惑は尋常のものではなかつた。

(四)かくてラテン・アメリカは永らく『店頭に吊り下げられた一塊のハム』で徒に石油帝國主義國家の食欲をそゝる食料であつたが、大戰を契機としてこゝに猛烈な國家主義的潮流起り、就中石油採取に於ける外資排撃運動は最も著しいもので、當然外資側との間に激烈な争闘を惹起するに至つた。

以下ラテン・アメリカの主要石油生産國につき、それらゝ如上の問題を地政學的に考察したのであるが、その詳細は紙面の都合上省略する。(追て石橋博士還曆記念論文集に發表の豫定)

かくて此等の國家は自己の石油資源を中心としてそれを守らんがために石油帝國主義國家と惡戦苦闘を續けた

のであるが、而も殆んどすべては、努力が水泡に歸した即ち今日の世界狀勢の下に於ては、石油を生産する小國の運命は殆んど例外なく同一だからである。それは帝國主義國家の分捕の目的物にしか過ぎず、問題はたゞいつ誰から分捕られるかにある。ハンス・ラブル曰く、この資源が、かくも不幸を齎らす自然の贈り物であつたとは誰が豫期したらうかと。要するに石油資源を制せんとする強國相互の爭鬪とその結果たる外國の重壓と、更にそれを脱れんとする國民の努力とはラテン・アメリカに於て地政學的問題の典型的なるものを展開してゐる原因である。

中世村落の様相

米倉 二郎

地理論叢第八輯に發表の筈。

屋根の傾斜と降水量との關係

島 之 夫

屋根の傾斜は降水量の多い地では急であり、降水量の少い地では緩であるといふことは常識的に誰もが知つてゐることである。今これを數量的に現はしてこの兩者の間に如何なる關係があるかといふことを考察しようと思ふ。

屋根の傾斜は實際建築に従事してゐる人達は水平距離一尺に對して垂直的に何寸高くなるかといふことに依つて四寸勾配とか五寸勾配とか稱してゐる。然しこの表現法は我々には一寸見當がつきにくいから、此處では屋根の面が水平線と作す角度に依つて示さうと思ふ。即ち最も分り易く言へば切妻屋根の場合に於てその屋根の作る二等邊三角形の底角を指してゐる。屋根の角度といへば頂角と混同するおそれがあるので特に此處にことわつておく。

私が過去數ヶ年間に於て日本の各地に蒐集を試みた民屋の屋根の寫眞によつて屋根の傾斜を計つて見ると、最も急なものゝ飛彈白川村御母衣のあの壯大な民屋の屋根でその角度は五十五度であり、最も緩なものと同じく

白川村の木片葺屋根十九度である。同じ降水量の白川村にかくも兩極端を見出したことは一見まことに不思議な話であるが、前者の屋根の急な理由はその材料が草葺であつて、普通の場合にも大體排水が困難な上に、白川村のものは五階造りの雄大な大家屋である關係上自然その構造上屋根が急とならざるを得ないのである。後者は白川村字平瀬にあるもので此の部落は最近火事のため舊來の白川造りの家屋を焼失し、新たに全部木造の二階建の家を造つたため、屋根も木片葺で、材料と構造との差によつてかくも異なる屋根が同じ降水量の地に存在するのである。

それで今、草葺屋根に就いて考へて見ると大體近畿地方では四十五度前後のものが多く、必ずしも降水量の多い地程、傾斜が急であるといふ風にはなつてゐないそれは年平均降水量の外に降水日数の多少により一日平均の降水量を考慮する必要もあり亦一日平均の降水量が等しくともその場合の風速の大小により排水に難易の別がある。理由の要素が複雑で簡單に屋根の傾斜と降水量

との關係を云々することは困難である。

瓦葺屋根の場合には別表の如く屋根の傾斜は降水量の

府縣名	屋根の傾斜	降水量
京都	三七度	一六一六
奈良	三二度	一四九〇
大阪	三〇度	一三八五
兵庫	三〇度	一三七四
岡山	二五度	一一三五

多い地程急になつてあり、降水量の少い地程緩である。これは都合よく現はれた一例で、全部この様になつてはゐない。降水量が多ても雪國では却つてその滑り落ちるのを防ぐ意味に於て屋根を緩にする必要がある地方もある。

草葺屋根と瓦葺屋根と木片葺屋根の傾斜を各地で比較してみると大體に於てその角度は瓦葺を一とすれば草葺は一倍半、木片葺は四分の三になつてゐる。

近畿地方に於ては草葺四十五度、瓦葺三十度、木片葺二十度前後の屋根が卓越して存在することが明瞭になつた

西都原古墳群に就いて

松 本 博

氣山津の變遷

小牧 實繁

若狭國三方郡久々子湖の現在の湖岸線より約一杆、現海岸線より約三杆の内陸に氣山の聚落がある。これが平安末期より鎌倉時代にかけて隆盛を極めた氣山津の遺蹟である。當時氣山津は越前敦賀・近江鹽津・大浦・木津と並び稱せられた、北陸諸國京都間の交通線系上に於ける重要な港であつた。これは史料通覽所收勘仲記弘安十年七月條に見える太政官符によつて知られる。然るに中世の後期に至ると小濱といふ競争者が現れ、小濱は氣山津を壓倒したのみならず敦賀津や三國港にも増して隆え、表日本の兵庫・堺と肩を並べるに至つたのである。氣山津は小濱の隆盛に反比例して衰頽したやうで殆んど歴史の舞臺には登場して來ない。尤も地方的な港としても港の生命を保持しなかつたか否かは不明である。併し徳川時代も寛文以後になると港としての氣山の生命と機能とは完全に消滅することとなつたのである。これが決定的

な契機となつたものは寛文二年の大地震であつた。湖岸が干上り多くの新田を生じ、氣山の前面は水田となり、氣山は僅かに農村として命脈を保つに過ぎなくなり、日本の氣山ではなく、若狭の氣山、三方郡の氣山に過ぎないものとなつたのである。今、氣山に市なる地名が残存するが、徳川時代のものには出て來ないやうであるから、これは或は氣山津盛なりし頃の市ではなかつたかと思はれる。また氣山には延喜式神名帳に名神大月次、新嘗とある宇波西神社があるが、神名帳北陸道七國三百五十二座のうち、月次、新嘗の祭に預かり祈年祭の官幣に預るのは此の社のみ、また社務職も青蓮院宮であつたといふやうな譯で、現在の微々たる氣山には似つかはしくないものである。河川の爭奪作用により谷の大きさと水量との調和しない河谷に當るものを人文上吾々は茲に見るのである。我々は式内社を古代聚落發達の「Index」と見てゐるが、逆にこれを古今の變遷を發見する一の手がかりとすることも將來試みられてよいと思ふ。

(昭和十年十二月二十五日)

日本最初の船法度について

藤田 元春

京大經濟學部教室に、元祿頃の油紙にした船法度がある、天正頃の船法度もあるが島津國史によると貞應二年癸未三月十六日に、兵庫辻村新兵衛尉土佐浦戸之篠原孫右衛門、薩摩坊津飯田備前守が北條義時に召されて船法度三十一ヶ條をつくつて之を天下に施行したとあるので三高教授平田元吉氏の手を煩はして東京の島津邸に紹介して、その寫本を得たのであるが、恐らくこれが日本最初の船法度であらう、牧民金鑑などに出てゐる船法度に比べて、この島津家舊譜の中の法度は時代がふるい、たとへば其第一條「寄船、流舟者其在所の神社佛寺の可爲修理事、若其舟に於有乗者は舟主爲進退事」といふ文句の如き後世の法度、例令ば正徳頃のものは「自然寄船並荷物流來るに於ては、之を揚げおくべし、半年過迄荷主無之者揚置之輩之を取るべし、若右の日數過ぎ荷主出で來りたると雖も不可返、然りといへども、其所の地頭

代官之差圖可請事」など、あつて、今日の遺失物拾得手續に類するが、古代は實は貞應の例のやうに寄船、流船は其地の神社佛寺の所得となつたやうである。

その著しい歴史は宗像神社へ、阿知使主が吳から工女四名をつれて歸朝した時、意神紀によると兄媛を胸形大神に獻したとあるではないか、景行紀をみると日本武尊は神宮に蝦夷を献上されたともあれば、景行天皇は五十二年秋自ら小碓王の所平の國を巡狩せられ、伊勢に幸して東海に轉入され上總安房に行幸の後其歸國の際購臣を伊勢に居くと記されてゐる、即ち昔は海上への交通に關して、寄船の場合には（流れ舟のみではなく）、人も亦その船のついた土地の神社の有に歸するといふ慣習があつたのではなかつたか。

従つて我國では海上交通の便のある海濱に於て、其地の大神といふものが自から有力な存在となつた、越前の氣比神宮、瀬戸内の住吉神社筑紫宗像の大神、出雲の杵築宮或は若狹彦の神社、九州宇佐の大神、かうした歴史上の大神の所在とその海外關係を考へる時、有史以前も

しくは有史以後の多くの神社を中心としての海外交渉が考量の上に入るのではないか。伊勢の大社は垂仁紀には是を磯宮いよのみやといふともあつて、主として東國への海上交通の要衝にたれ東國の人々を臣従されたことは景行紀に明記されてゐる。自から神風の伊勢の神宮の御神徳によつて天下統一の核子が出来たと考へてよいやうである。

いづれにしてもこの船法度の第一條は古い我國の海國開發の歴史の片鱗をしめすものであると信ずる

伊吹山四近の積雪と人文との

關係

田 中 秀 作

近江盆地は地形的には一の纏つた地理區をなすが、氣候的には必ずしも一樣に見ることは出来ない。氣溫、降水量、風向等の各氣象要素によりて數區に分たれると思ふ。今主として冬季の積雪分布によりて區劃すれば大體湖西の市場、小松、湖東の安土、八日市を連ぬる一線によつて北東近江と南西近江の二區となる。之は主として

伊吹山測候所、彦根測候所及び縣下各氣象觀測所の積雪量、根雪期間、冬季の風向等によつたものであるが、其の根本は冬季に卓越する北西の季節風と此の主風を直接に受ける本縣北西部の地形殊に九〇〇米乃至一〇〇〇米の山地の配置に基く。即ち此線以北では若狹灣からの濕風を遮ぎる山脈が比較的低く、以南では三國山脈や比良連嶺が障壁となつて吹雪の襲來を防ぐからである。而して北東近江は最深雪五〇糎以上根雪期間三〇日以上で表日本型と裏日本型との漸移地帶となり、更に春照、長濱の線、吉槻、木之本、白谷の線と次第に北陸型に近くなり、遂に柳ヶ瀬中河内に至つて全く裏日本深雪地帶と同様となるが、海拔一三七七米の伊吹山頂は勿論山地や山麓一帯の如きは最深雪帶に屬するのである。伊吹山測候所の累年觀測の平均値によれば山頂に於ける根雪期間一六五日最深積雪一一八二糎、山麓附近は根雪期間が夫々春照五三日、長濱二五日、虎姫三五日、木ノ本六四日、谷口五六日、吉槻七四日で、最深積雪は春照一三六糎、長濱一八八糎、虎姫一九二糎、木ノ本一七〇糎、谷口一

六〇種、吉槻一九五種である。此の伊吹山を中心とする最深雪帯に於ては積雪量の多量なると根雪期間の長きに互る爲に種々の影響を人文上に與へる。其の好影響としては水源の涵養により灌漑水や水力發電に利すること、ウインタースポーツを盛ならしめること等であるが、悪影響の方が寧ろ大で交通通信機關の障礙は勿論農産殊に麥作、菜種作の減收、林産の被害等相當顯著なものがある。(數字省略)それよりも地理學に興味の深いのは積雪と崩雪の脅威に基く季節的移動聚落で之は伊吹山脈の東麓岐阜縣側の掛斐郡内に存し春日村の笹又を始め坂内村の廣瀬淺又川上、淺又、諸家品又等の出作夏村を形成して茲に山村住民の經濟生活が營まれ、初冬新雪の預來と共に全部落を擧げて夫々の母村に歸還して越冬し茲に一年中の主要な社會的行事を済ますのである。

近世に於ける米作發達の

一面

内田 寛 一

挨拶

石橋 教授

八二

最後に石橋先生が立たれて略々次の如き御挨拶があつた。午餐會の席上の御挨拶は教室の出身の人達に對するものであつたが今度のは主として外部から來た聴衆に對するものであつた。

一近時地理學殊に人文地理學の興隆普及には目覺ましいものがある。我が京都帝國大學文學部地理學教室も公開講演或は地理論叢の刊行等によつてその普及に務めてきた。この大會に外部から出席された方は皆地理學の研究に熱意を有して居られる方であると思はれる。斯學の普及を計つてきた我が教室は熱心な研究家に對して決して門戸を閉ぢるものではないのであるから、進んで教室に來訪されて研究或はその發表をされることを歓迎するものである。(文責在安藤)

教室雜記

昭和十年十月七日

教室の秋期旅行に出發、八日早朝小郡着、自動車にて秋吉臺に向ふ。長者ヶ森迄徒歩、カルスト地形を研究し、秋芳洞を見る。自動車にて山口市に至り、汽車にて長門峽驛に至る。保勝會員の案内を得て長門峽を踏査す、湯田温泉一泊、九日午前山口市觀光課は自動車を提供され、吏員の案内を受けて、龜山公園、博物館、市中を一覽す。汽車にて厚狹、正明市を経て仙崎に至る。青海島保勝會員及橋長旅館主は發動汽船に酒肴迄設けて歡待する。石英班岩、砂岩、凝灰岩等の海蝕による奇觀を賞しつつ、島を一周す、その夜萩市に泊る。十日、前萩中學校教諭藤本老先生は市役所よりの依囑により特に我々の爲に案内説明の勞に當らる。自動車にて萩城の故址を問ふ。それより明倫館址、松陰神社、伊藤博文舊宅等維新英傑修養の跡を訪る。後鍋山に登り萩市一帯を展望す。一應此處にて解散し、見島、隱岐、松江、夜見濱、東郷

池等を各自調査研究して、十三、四日の頃相繼いで歸學す。今回の修學旅行に際しては本學内觀光學會大道君の盡力により、各地の觀光當局より絶大なる便益を提供され、巡檢の收穫大なりしは感謝措く能はざる處なり。

十一月二十三、四日

文學部創立三十周年記念として各教室の公開に當り、當教室に於ても陳列室並に實習室に地圖圖書器具等を展觀す、特に出品せし貴重地圖圖書名左の如し。

日本の部

扶桑國之圖(寛文二年)、日本圖(延寶六年)、日本全國(延寶八年)、本朝圖鑑綱目(貞享四年)、大日本國全備圖、大日本國圖(元祿四年、石川流宣)、本朝圖鑑(寶永二年、石川流宣)、改正大日本備圖(元祿時代、岡田自省軒)、大日本國大繪圖(享保十五年、石川流宣)、改正日本輿地路程全圖(寛政三年、長久保赤水)、文化改正拾遺日本北地全圖、房州津輕間海圖(享和元年、船具職大野屋五左衛門)、東北六ヶ國海邊之繪圖、山城國古圖(寛延二年)、東西蝦夷山川地理取調圖(安政六年、松浦竹

四郎)、間宮倫宗韃靼紀行、平壤府古圖屏風

支那の部

皇明職方地圖(明板)、廣輿圖、内府地圖(乾隆十三排銅版圖の複製)、清代清省輿地圖說、清代漕運圖、海防圖(七省沿海圖說原本)

西洋の部

セバステイアン・ミュンスター世界誌(一五五〇年バール)、ヨアン・ブラーウ世界新地圖帳イスバニア篇(一六四七年アムステルダム)、同ブリタニア篇(一六四八年アムステルダム)、ダンヴェイル支那新地圖帳(一七三七年バリ)、ノルデンシヨルド古地圖影本(一八八九年ストツクホルム)、パウル・テレキ日本地圖史(一九〇九年プタペスト)、ラツツェル、アメリカに於る支那人の分布(著者自署本石橋教授藏)

十一月二十五日

本會第三回大會開催さる。講演要旨前記の通り。

十二月十日

演習に於ける石橋教授の御挨拶の要旨は左の如くであ

る。

私は、長い間の病氣の爲に、演習にも出られず、眞に遺憾に思ひ又諸君に對しても申譯けない次第であつたが、本日は自分の最後の思ひ出に諸君の研究振りが見度いと思つて出て來た。又日頃書物に親しみ得ず、心淋しい氣持がして居たが、先程から教室へ來てみると、若い諸君がしきりに勉強してゐるのをみてうらやましく、又氣持よくも思ひ、愉快に感ずる次第である。一月退職すれば書物に親しむことも少く、一沫の淋しさを感じるので、こゝに諸君の研究振りをみて自分の落漠たる氣持を慰め度いと言ふ利己的な考から本日こゝに出て來た次第である。

こゝに出席せられてゐる諸君は少くとも地理學同好の諸君と思ふが、斯くも多數諸君が熱心に出られるのをみて甚だ嬉ばしい。實は演習は多くでやることはよくないゼミナールは「苗床」と言ふ意であつて、ある小さい地域に苗を作るといふことで、多數の同好の士が集つてやるのが演習である。故にこの澤山の人では本當の演習は出

來ない。従てふだんは地理以外の人が出られないのは已むを得ない。

ゼミナールの方法にも色々あり、書物の輪講といふものもある。これはある特殊地域の研究にはいいが、一年内に廣く學ぶにはよくない。その爲には諸君に、成る可くいろ／＼の書物を讀んで貰ひ、智識を擴める方法を私は探つてゐる。小牧君もこの方法を探つて居られるやうであるが、併し今後は小牧君の意見で變更されてもよい。

同一の効果、或ひはその以上の効果が擧がりさへすればよい。又論文には英獨佛と夫々皆癖があるのであるからなるべく、此等諸國の論文を夫々讀んで欲しい。

次で、本日の演習の講評をなされ、最後に、健康に注意して諸君の研究が研究甲斐あるやうにして貰ひ度いと述べられた。(文責在朝永)

一月十五日

三回生諸君全部無事卒業論文を提出されたり、論文題目左の通り。

本邦都市の人口地理學的考察 淺井得一

京都附近の先史地誌

神尾明正

伯耆大山山麓の土地利用に就いて

木村憲治

臺灣の人口地理學的考察

庄司久孝

新潟市の形態に就いて

須藤賢

南北地域別より見たる朝鮮の農業概論

西 豊

オスカー・ベツシエル

野間三郎

大和十津川村の地誌的考察

長谷部健史

富山平野に於ける賣藥生産地帯

村井敏衛

備後の因ノ島研究

村上次男

土佐の水産業に關する地理學的考察

山崎修

會員消息

就職・轉任

入江久夫 滿鐵經濟調查會委員

岩根保重 關西學院大學圖書館司書(兼任)

増田忠雄 滿鐵教育研究所員

大橋英男 斐太中學教諭

近藤忠 神戸第一中學校教諭

兼子俊一 淡路高等女學校教諭

小葉田亮 能代中學校教諭

除隊

かねて近衛歩兵第三聯隊に入營中の大橋英男君は舊臘九日

出度く滿期除隊された。

結婚

織田武雄 昭和十年十一月

小葉田亮 同 八月

谷淵梅龜 同 十一月

轉居

塚本常雄



入江久夫

野中健一

松下清雄

岩根保重

太田喜久雄

増田忠雄

米倉二郎

別技篤彦

川上健三

室賀信夫

大橋英男

日下卓造

近藤忠

御子柴幸一

尙轉居未通知の方は教室宛に御報せ下さい。

教室來訪

伏見義夫 昭和十年八月

宮川善造 同 十二月二十九日

内山秀雄 昭和十一年一月四日



海老原治三郎 昭和十一年一月四日

武 政 治 昭和十年七月

岩 尾 常 善 同 八月

著 書

石橋五郎校閲 人文地理學概論

別技篤彦著 太平洋を繞る國々

◆會員からの便り

滿洲に住みて

増 田 忠 雄

地理を研究してゐるものに全然新奇な處はない。然しこれは知識として存在してゐるのであつて實見するに及んで又別の感じが深い。滿洲と云ふ處も内地で考へてゐた處と大差がないと云ふものゝ、感じの上では又新しい發見をする。

今迄内地で滿洲と云ふと遠い處、何か特別な處と云ふ感じが深かつたが、その土地に住んで見ると別に内地と變りはない。これは景觀上の問題ではなく、その土地の精神的感情である。別に遠い處に來た感じもなく淋しい感情もない。奉天の銀座春

日町の明菓の二階でお茶を飲みながら松内アナウンサーの早慶戦でも聞いて居ればこれが奉天かとも思はれる。然し前に云つた感情も日本的に滿洲がなりつゝあるから起るものとも思はれない。城内の支那町を歩いて日本と同じやうな人間生活が行はれてゐる。北滿を旅行してコロンバイルの草原を歩き騎乗の蒙古人を見てもやはり同じやうな人間生活がある。蒙古包の中にも家庭生活がある。

萬根廟の僧侶等も、滿洲里のロシア娘も、拉濱沿線の朝鮮農民も、毎日々々生活の営みに餘念がない。

之等のことは内地で考へてゐた處と大變な相違がある。今迄は何か不思議な近づき難い感じが蒙古と云ふ概念の中には含まれてゐたが、その土地に行つて見るとその様なへだたがなくなつて我々との間にも何の差別も見られなくなる。チ、ハルで蒙古人の師範學校を參觀したが内地の學校と大差もなく、將來蒙古の初等教育を受持つ人々を養成してゐる。たゞ語學が大變で日滿蒙英の四ヶ國語をやり、牧畜蒙古人に農業を教へてゐる處に特異性があつた。ハイラルの南方南屯の蒙古部落で小學校を見たが子供等は嬉々として教授を受けてゐた。滿洲里より歸途一等寢臺車の中で蒙古出身の滿洲國陸軍中將と一緒にゐたが

一見何等日本の將校と變りもなく、各驛では蒙古兵の送迎があつた。ハイラルでは蒙古騎兵が蒙古包式の天幕を張つてみたが指導教官の日本將校は彼等の素質の優秀さを物語つてゐた。我々は此處で今迄の蒙古觀を改めねばならなくなつた。結局どこに行つても人間は同じである。

之等の北滿の淋しい驛々にも日本人の進出は驚くべきものがあり、深く人間至る處に青山ありの感がした。

奉天に居て之等の地方を考へると淋しい田舎だがそんな處にも日本人が居る。拉法で數人の日本人青年が水田を耕作してゐるのに逢つたが、實に勇ましいものである。こんなのを見ると奉天など日本の内のやうな氣がして北滿旅行の旅を終へ夜の奉天のネオンサインを仰ぎ見た時日本に歸つた感が深かつた。

要するに人間は何處にも住めるものだと言ふこと、文化の高い日本人も亦何處にも生活出来るものだと言ふことが痛切に感ぜられた。(一九三五、一一、一一)



拜啓向寒之候と相成り候處諸賢益々御健祥之段奉賀候、陳者私儀去二十七日結婚致し候、妻の名は幸子と申候

就いては將來益々諸賢の御教導を相仰度乍略儀失禮御披露旁々御願申上候 敬具

十二月三日

谷 淵 梅 龜

談 話 會 御 中

後 記

會報第三冊(石橋博士還曆記念特輯)を不手際な編輯乍ら會員諸兄に御送り致します。

會報の印刷費は全部石橋先生から戴きました。又石橋博士論著目録の作成には岩根保重・田中秀作兩氏の御盡力を煩はしました。此處に特記して厚く感謝の意を表す次第です。

今度は特別號である爲か地方在住先輩からの御寄稿が多かつたのですが、次號にも引續き御執筆下さるよう御願ひ致します。會報の原稿の字數の制限は出来るだけ融通をつける考へてす。御忙しい方は御近況なりとも御報せ下さい。尙會報に就いて御不満御希望がありましたらどしどし御申出願ひます。

次號は新學期に成る可く早く出す豫定です。

昭和十一年二月六日印刷
昭和十一年二月十一日發行

(非賣品)

京都帝國大學文學部

編輯兼
發行者
地理學教室

右代表者 小牧實繁

京都市下京區北小路新町西入

印刷者
須磨勘兵衛

京都市下京區西洞院通七條南

印刷所
內外出版印刷株式會社

地理學談話會報
第三冊